

ラオス北部の稲作神話と稲作儀礼

—女性と野鶏と魚を中心に—

川野和昭

I はじめに

このラオス北部における稲作神話と儀礼は、川野がこれまで収集したラオス北部におけるタイ、ラオ、カム、アカ、モン族等の少数民族の焼き畑稲作に関する神話・口頭伝承が、多様な種籾の維持、伐採・播種・成育促進・収穫儀礼の執行、使用される道具に反映されていることを見ていきたい。また、大林太良⁽¹⁾や山下欣一⁽²⁾、登山修らによる奄美、沖縄諸島の稲作神話との若干の比較も試みてみたい。

II 稲作神話の諸相

1 稲作あるいは収穫作業・運搬作業開始の起源

(1) 稲作開始の起源

① ルアンババーン県ナムバック郡コックナン村（タイルー族）

N20° 17' 33.2" E102° 15' 08.8"

豊かな野生の森から飛来する稲

種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、ホーン（播種儀礼を行った聖なる畑）を閉めている竹の一方を開いて、家から持ってきたガイ・メイ・ウーン・カオ（鶏・雌・抱く・稲）と呼ぶ、家族で育てた内のよく卵を産み、よく雛を育てる鶏（毎年同じ鶏）と、パーシュウ、パークンという雌雄2匹の魚を、ホーンの中に生きたまま供える。この鶏と魚を供える由来として次のような伝承がある。

昔、タイルーは米作りはしていなかった。パーマイ・ヒーマパーン（森・豊かな野性）という山の中に、直径が7拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、村の家のラオカオ（米倉）をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、籾が飛んできて独りでにいっぱいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたメーマイ（寡婦）が、ラオカオを作り直していた。ところが、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは籾を迎える準備が終わっていたのでいっぱいになった。しかし、メーマイのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた籾はラオカオの梯子の登り口に溜まっていた。メーマイは、悔しさの余り怒って棒でその籾を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の籾が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた籾はカイパー（野鶏）の雌が保管した。また、川に逃げた籾はパシュウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ（～さん・お手伝い・ソツ）と命名して保管した。それ以後10万年間、タイルーは籾がなくなって

しまった。

ところが、10万年後、あるお金持ちの女性が、ヒーン（三角網）を持って川に魚取りに行ったところ、パークンという種類の雄の魚を捕まえた。彼はパシユウという種類の魚のナンタロタラーンの恋人であったので、パシユウは「恋人を捕られたら困るのでパークンを助けてください。その代わりに、稲を差し上げますのでパークンを返してください」とお願いをした。女性がパークンを返すと稲の種をくれた。その時からタイラーは再び稲を手に入れ、稲作りを始めることができた。この時の稲はカオ・シユウ（稲・パシユウ）という名前の稲である。だから、ホンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウーン・カオとパークン、パシユウの2匹の魚を供えるのだと言う。

② Houa Pang 県 Thong 郡 Houayd Teun 村 (Yao 族)

N20° 16' 38.3" E103° 22' 13.7" H1136^海

2008年3月2日聞き

飛来する巨大米と逃亡する稲と鼠（野鳥）が盗み復活する稲種と稲作の起源

昔々、粳粒は親指ほどの大きさであった。人間が稲作りをしなくても、米倉を作って準備をして稲を呼びに行くと、稲はひとりでに米倉に入ってくるものであった。

ある夫婦がいた。男主人が稲を呼びにゆき、奥さんは米倉を掃除することになった。ところが、奥さんは米倉を掃除せずに不倫をしていた。男主人が稲を呼んでから米倉の掃除を始めた。だから、稲がやってきたのに間に合わなかった。しかし、稲が入ってくるので奥さんは叩いた。叩かれた米は怒って逃げた。遠い遠い海の向こうに逃げた。だから、どんな動物も取りに行けなかった。

ところが、ナオ・ピョウ（鼠・稲）という小さい鼠だけはそこに取りに行けるというので、頼んで取りに行ってもらった。ナオピョウは、小さな木の葉に乗って取りに行ったが、稲は帰らないと言った。そこで、ナオピョウは粳の隅っこを少しだけ齧って帰ってきた。人間はその米を種にして稲作を始めた。だから、今のようにこんなに小さい粳になった。ナオピョウは、自分が持って帰ってきたので米を食べているけれど、全部を食べずに人間が食べる分は残しておく。

※ナオピョウの代わりにノックマイチャアーという野鳥が、海の向こうまで飛んで取りに行ったという話もある。

③ シェンクアン県カム郡ニョックワ村 (タイダム族)

N19° 39' 03.5" E103° 29' 11.1"

高木に実る巨大米から地面に植える稲作開始への起源

昔、稲は蔓性の高い木で、高いところに実るものであった。食べたい人は、木の上に上って取って食べていた。その米粒は、瓢箪や南瓜の大きさであった。メーマイは木に登ることが出来なかったが、どうしても米を食べたくなかったので、一生懸命に木に登って粳を取って下りてきた。メーマイはとても疲れたので、その粳を怒って刀で細かく切り刻んでしまった。

その一部は自分で食べて、残ったものは、「これから草のように地面に生えるようになり

なさい」と言って、地面に播いた。だから、稲は今のように地面に育つようになった。

④ボケオ県ムン郡ナムガム村（ヤオ族）

N20° 38' 29.4", E100° 27' 36.5", H495m

2009年1月10日聞き書

巨大米と小粒化と稲作開始の起源

昔、海があって 右と左の陸地があった。一方の陸地が3年間、雨もなく稲が枯れてしまった。人間は住めなくなって筏をつくって反対側にやってきた。人間は種籾がなくてノツメエという野鳥に「稲をもってこい」と言った。それはノツメエと同じ大きさの稲籾だから持って来ることができなかった。籾の上だけを持ってきた。これを種にして稲作を始めたので稲は小さくなった。だから稲が実ったらノツメエが直ぐに食べに来る。その種は糯だか粳だかわからない。

⑤ Luang Prabang 県 Kham 郡 Samtom 村 (Khmu 族)

N20° 26' 27.8" E102° 56' 51.9" H830m

2008年3月5日聞き書

洪水漂泊・兄妹始祖型巨大米

昔々、世界中が洪水になり海だらけになった。そのとき、全ての人間が死んでしまった。しかし、神が、兄妹にだけには「高い山に入ってください」と言ったので、そのとおりにして世界中で兄妹だけが生き残った。

二人は、米もなかったので、芋とかを食べて生きていた。家を造って一緒に生活していた。大人になって結婚する年になったが、兄妹だから結婚できないでいた。すると、ある日、尻尾の長い黒い鳥が家のところに飛んできて、「兄妹であっても抱き合っても何をしても良いのよ」と鳴いていた。しかし、一緒に住んでいても子どもはできなかった。

あるとき、ノックカウという見たこともない鳥が、いつまでもいつまでも、何日間も鳴いていた。兄は、やかましいと思ってモ（弩）で撃ち取った。それを解体してみたら、見たこともない種が出てきた。それは、一種類一粒ずつ百種類も千種類もあった。

そこで、どんな種類か知りたくて、天日に干してから播いてみた。最初の年は、本当にきれいな稲が育って10kgの収穫があった。その稲はまだ食べずに、次の年も畑に播いたところ、10束以上の稲が穫れた。食べるために、踏み臼で搗いて精米して、最初は水と一緒に入れて食べたら美味しかったので、たくさん食べた。また、別に蒸して食べるのもっと美味しかったので蒸して食べた。その後、稲作りをするようになった。

やがて、妹は子どもを孕んだ。しかし、生まれたのは瓢箪であった。子どもだとは思わず瓢箪だと思って、気にせずに家にそのままにしておいた。ある日、畑の仕事から家に帰ってみると、妹はまだ畑に行っているのに、ご飯の準備や家畜の餌もすべて準備がされていた。兄は、不思議だと思って屋根の上の方に隠れて覗いていた。そうすると、妹が生んだ瓢箪の穴から子どもが何人も出てきた。瓢箪の中では小さいのに、出てくると大きくなって、ご飯や家畜の餌などの準備をしていてくれた。兄は、それを見て瓢箪を潰した。そのとき出てき

た子どもたちが、人類の元になった。

(2) 収穫作業開始の起源

① Houa Pang 県 Thong 郡 Pieng Done 村・Khmu 族

N20° 06' 13.7" E103° 23' 18.8" H653^北

2008年2月25日聞き

飛来米と収穫作業開始の起源

昔は、畑に作った稲が実る時期になったら、米倉をきれいに掃除しておく、収穫作業はしなくても稲はひとりで畑の稲の穂から飛んでくるものであった。

ある年、一人のメーマン（妊婦）が米倉の入り口に座って、ラーカチャンというすっぱみのある木の葉を食べていたところに稲が飛んできた。メーマンは、その粉が目に入りそうになったので、ラーカチャンの葉で叩いた。稲は怒って畑の稲穂に逃げ帰ってしまった。それ以降、人間は稲の収穫作業をしなければならなくなった。

野鳥の死体から生まれた種粉

昔、貧乏な男の子のコンロック（両親のいない子ども）がいた。ある日、山に猟に行ったところ、たまたまトウンプルーという野鳥を撃ち取った。家に持って帰って解体したら、胃袋の中に稲の種を見つけた。

コンロックは、その年に焼畑を狭い面積拓いて、畑の中の白蟻の巣の周りにその種を播いた。その稲は成長が良くきれいに実って、米倉に粉がどんどんひとりで飛んできて、米倉がいっぱいになった。ところが、妊娠している女性が米倉に来て、ラーカチャンという葉を食べていた手で稲を叩いたので、飛んでこなくなった。

それからコンロックはだんだん豊かになっていった。村人もその種をもらって栽培するようになった。この稲の種は、コンロックの奥さんがもらいに来て種にしたので、Hngo Mok（稲・妹）と名付けられた。

② ルアンパバン県ゴイ郡ハッサプーイ村（カム族）

N20° 42' 27.3" E104° 18' 45.2" H341^北

飛来米と収穫作業開始の起源

昔、主人を亡くしたマボイ（寡婦）という名前の女性がいた。昔は、畑の稲が実るころになると、チョオ（畑の作小屋）をきれいにしておくと、穂から粉が飛んできてくれた。

ある年、マボイ以外の人は主人もいたので米倉の準備も終わっていたが、彼女だけは準備が間に合わないでいた。準備が終わらないうちに粉が飛んできたので、彼女は怒ってチャツチャムという葉っぱで粉を叩いた。粉は怒って畑の穂に飛んで帰った。その時から手で扱って収穫しなければならなかった。だから、収穫の時にチャツチャムという葉っぱを食べてはならない。

③ウドムサイ県ガー郡ティーンタイ村（タイルー族）

N20° 15' 04.5" E101° 57' 54.3" H500^米

飛来米と収穫作業開始の起源

昔は、畑を作って収穫作業をしなくても、米倉をきれいにしておけば、稲は畑から独りで飛んできて米倉を一杯にしてくれるものであった。

ところが、主人も子供も無くした独りぼっちな女性がいた。その女性は1人であるため、米倉の掃除が遅れていた。まだ掃除が終わらない内に、稲が飛んできた。「私はまだ準備ができていないのに、何故飛んでくるのか」と言っ、棒で叩いた。稲は怒って飛んで逃げてしまった。それまで籾粒は、瓢箪と同じぐらいの大きさであったが、叩かれてたために今のように小さな粒になって逃げてしまった。それ以降、稲は畑から米倉に飛んでくることはなくなり、人間は収穫作業をしなければならなくなった。

(3) 稲の運搬作業開始の起源

①ボケオ県ムン郡ナムガム村（ヤオ族）

N20° 38' 29.4", E100° 27' 36.5", H495^米

2009年1月10日聞き

飛来米と稲の運搬開始の起源

昔、村の籾倉をきれいに掃除した後、竹の棒で穂摘みした稲をつんでおいて帰ってくださいと頼んだら家が家まで歩いてきた。

ある家の夫が「籾倉を掃除してね、私は籾をつれてくる」と妻に言って畑にでかけたが、妻は子供を抱いて遊んでいた。妻は掃除をせずに夫に叱られ、掃除を始めたが、稲が掃除の途中で入ってきたので怒って稲を叩いたら、稲は畑に戻っていった。その時から人間が運ばなくてはならなくなった。

②ルアンナムター県ナーレー郡サリアーンパン村（ラメット族）

N20° 22' 13.6" E101° 12' 51.2" H443^米

飛来する羽根持ち稲と稲の運搬作業の起源

昔、ラメットの人々は焼畑をしていた。収穫の時は、稲を扱って畑の作小屋をきれいに掃除して、米倉にして稲を入れていた。そのころは、稲には羽根が付いていて、村の米倉迄は運ばなくても、村の米倉をきれいに掃除して、各種類の稲が入るようにいくつものサプーンを準備して、口笛を吹きさえすれば、独りで飛んできてくれていた。

ところが、あるおじいさんが、年取っていたので米倉の準備の途中で疲れてしまって、大きな溜息をついた。それは、まるで口笛のようになったので、稲はそれを聞いて飛んできた。蜂みたいにたくさん飛んできた。

しかし、おじいさんは、「まだ準備ができていないので来るな」と言っ、飛んでくる稲たちを箒で叩いた。叩かれた稲たちは怒って畑に飛んで帰ってしまった。途中で村に飛んで来ている稲たちにも「僕は叩かれた。お前たちも行く必要はない。一緒に畑に戻ろう」と誘って、稲たちは全部畑に飛んで戻ってしまった。それ以降、畑から飛んでこなくなり、

人は畑から村まで稲を運ばなければならなくなった。飛んできていた稲は、ゴツ・パエン（稲・羽根）という品種である。今も、ゴツ・カライという稲とゴツ・パエン・ヤオには羽根の短いものと長いものがあるが、羽根の短い稲はその時叩かれて切れたもので、羽根の長い稲は叩かれていないものである。

2 稲は始原において巨大米で人間の悪行で小粒化したという伝承

(1) 空飛ぶ巨大米と小粒化の伝承

① ルアンパバーン県ナムバック郡コックナン村（タイルー族）

豊かな野生の森から飛来する稲

種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、閉めてある竹の一方向を開いて、家から持ってきたガイ・メイ・ウーン・カオ（鶏・雌・抱く・稲）と呼ぶ、家族で育てた内のよく卵を産み、よく雛を育てる鶏（毎年同じ鶏）と、パーシュウ、パークンという魚2匹をホンの中に生きたまま供える。この鶏と魚を供えるのには次のような伝承がある。昔、タイルーは米作りはしていなかった。パーマイ・ヒーマパーン（森・豊かな野性）という山の中に直径が7拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、ラオカオ（米倉）をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、粃が飛んできて独りでにいっぱいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたメーマイというおばさんが、ラオカオを作り直していた。ところが、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは粃を迎える準備が終わっていたのでいっぱいになった。しかし、おばさんのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた粃は外に溜まっていた。おばさんは、悔しさの余り怒って棒でその粃を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の粃が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた粃はカイパー（野鶏）の雌が保管した。また、川に逃げた粃はパシュウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ（～さん・お手伝い・ソツ）と命名して保管した。それ以後10万年間、タイルーは粃がなくなってしまった。ところが、10万年後、あるお金持ちの女性が、ヒーン（三角網）を持って川に魚取りに行ったところ、パークンという種類の雄の魚を捕まえた。彼はパシュウという種類の魚のナンタロタラーンの恋人であったので、パシュウは「恋人を捕られたら困るのでパークンを助けてください。その代わり、稲を差し上げますのでパークンを返してください」とお願いをした。女性がパークンを返すと稲をくれた。その時からタイルーは再び稲を手に入れ、稲作りを始めることができた。この時の稲はカオ・シュウ（稲・パシュウ）という名前の稲である。だから、ホンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウーン・カオとパークン、パシュウの2匹の魚を供える。

②ウドムサイ県ガー郡ティーンタイ村（タイルー族）

N20° 15' 04.5" E101° 57' 54.3" H500m

畑から飛来する巨大米と小粒化

昔は、畑を作って収穫作業をしなくても、米倉をきれいにしておけば、稲は畑から独りで

に飛んできて米倉を一杯にしてくれるものであった。

ところが、ある主人も子供も無くした独りぼっちの女性がいた。その女性は1人であるため、米倉の掃除が遅れていた。まだ掃除が終わらない内に、稲が飛んできた。「私はまだ準備ができていないのに、何故飛んでくるのか」と言って、棒で叩いた。稲は怒って飛んで逃げてしまった。それまで籾粒は、瓢箪と同じぐらいの大きさであったが、叩かれてたために今のように小さな粒になって逃げてしまった。それ以降、稲は畑から米倉に飛んでくることはなくなり、人間は収穫作業をしなければならなくなった。

③ウドムサイ県ガー郡ティーンタイ村（タイル一族）

N20° 15' 04.5" E101° 57' 54.3" H500^米

畑から飛来する巨大米と小粒化

昔は、畑を作って収穫作業をしなくても、米倉をきれいにしておけば、稲は畑から独りで飛んできて米倉を一杯にしてくれるものであった。

ところが、主人も子供も無くした独りぼっちの女性がいた。その女性は1人であるため、米倉の掃除が遅れていた。まだ掃除が終わらない内に、稲が飛んできた。「私はまだ準備ができていないのに、何故飛んでくるのか」と言って、棒で叩いた。稲は怒って飛んで逃げてしまった。それまで籾粒は、瓢箪と同じぐらいの大きさであったが、叩かれてたために今のように小さな粒になって逃げてしまった。それ以降、稲は畑から米倉に飛んでくることはなくなり、人間は収穫作業をしなければならなくなった。

(2) 呼ぶと飛来する巨大米と小粒化の伝承

① Houa Pang 県 Thong 郡 Houayd Teun 村（Yao 族）

N20° 16' 38.3" E103° 22' 13.7" H1136^米

2008年3月2日聞き書

飛来する巨大米と逃亡する稲と鼠（野鳥）が盗み復活する稲種と稲作の起源

昔々、籾粒は親指ほどの大きさであった。人間が稲作りをしなくても、米倉を作って準備をして稲を呼びに行くと、稲はひとりで米倉に入ってくるものであった。

ある夫婦がいた。男主人が稲を呼びにゆき、奥さんは米倉を掃除することになった。ところが、奥さんは米倉を掃除せずに不倫をしていた。男主人が稲を呼んでから米倉の掃除を始めた。だから、稲がやってきたのに間に合わなかった。しかし、稲が入ってくるので奥さんは叩いた。叩かれた米は怒って逃げた。遠い遠い海の向こうに逃げた。だから、どんな動物も取りに行けなかった。

ところが、ナオ・ビョウ（鼠・稲）という小さい鼠だけはそこに取りに行けるというので、頼んで取りに行ってもらった。ナオビョウは、小さな木の葉に乗って取りに行ったが、稲は帰らないと言った。そこで、ナオビョウは籾の隅っこを少しだけ囓って帰ってきた。人間はその米を種にして稲作を始めた。だから、今のようにこんなに小さい籾になった。ナオビョウは、自分が持って帰ってきたので米を食べているけれど、全部を食べずに人間が食べ

る分は残しておく。

※ナオビヨウの代わりにノックマイチャアという野鳥が、海の向こうまで飛んで取りに行ったという話もある。

(3) 巨大米と小粒化

①シエンクアン県カム郡タットノイ村（ムイ族）

N19° 35' 36.1" E103° 35' 20.3"

昔、米粒は南瓜の大きさであった。メーマイ（寡婦）が踏み臼で搗いて精米しようとしても、大きくてなかなか精米できなかった。メーマイは怒って「精米するのに面倒くさいのでこれからお前は食べない。これからはマックベンとマックパオを食べる」と言っていて、地面を掘って、「お前は木の上になってください」とお願いした。そこでマックベンとマックパオは蔓を伸ばして木の上にはい上がってなるようになった。

また、メーマイは稲の所に戻って、「大きくて精米しにくいので、これから大きくならないようにしてやる」と言っていて、小さく割ってしまったので、米粒は今のようになんて小さくなってしまった。

②ボケオ県ムン郡ナムガム村（ヤオ族）

N20° 38' 29.4", E100° 27' 36.5", H495m

2009年1月10日聞き書

巨大米と野鳥の盗みによる小粒化

昔、海があって 右と左の陸地があった。一方の陸地が3年間、雨もなく稲が枯れてしまった。人間は住めなくなって筏をつくって反対側にやってきた。人間は種籾がなくてノツメエという野鳥に「籾をもってこい」と言った。それはノツメエと同じ大きさの籾だから持って来ることができなかった。籾の上だけを持ってきた。これを種にして稲作を始めたので籾は小さくなった。だから籾が実ったらノツメエが直ぐに食べに来る。その種は籾だか梗だかわからない。

③ボケオ県ムン郡ポンサワン村（アカアグイ族）

N20° 44' 39.3", E100° 28' 22.4", H620m

2009年1月9日聞き書

巨大米と小粒化

昔は人間は背が高く4～5mぐらい高かった。その時代は籾は拳大であったが時間がたつて人間も小さくなり籾も小さくなった。

④ルアンナムター県プーカー郡ナンパーマン村（ムスー族）

N 20° 41' 04.9", E 101° 00' 35.0", H 673m

2008年12月30日聞き書

巨大米と小粒化

昔は籾がトウモロコシの実の粒と同じ大きさであった。ある日寡婦が人が通る道の真中に

粃を天日干しにしていた。その時やもめの男が水牛を引っ張ってきて通ろうとした。それからその寡婦に通りから粃を片づけてくださいといったが、寡婦が片づけなかったので、男は水牛をつれてそのまま通った。そのため水牛の足で踏まれて米粒は今のようになくなった。

⑤シェンクアン県カム郡ニョックワ村（タイダム族）

N19° 39' 03.5" E103° 29' 11.1"

高い木に実る巨大米と小粒化と稲作の起源

昔、稲は蔓性の高い木で、高いところに実るものであった。食べたい人は、木の上に上って取って食べていた。その米粒は、瓢箪や南瓜の大きさであった。メーマイは木に登ることが出来なかったが、どうしても米を食べたくなったので、一生懸命に木に登って粃を取って下りてきた。メーマイはとても疲れたので、その粃を怒って刀で細かく切り刻んでしまった。

その一部は自分で食べて、残ったものは、「これから草のように地面に生えるようになりなさい」と言って、地面に播いた。だから、稲は今のよう地面に育つようになった。

⑥ポンサリー県マイ郡ナーカム村（タイダム族）

N21° 10' 43.2", E102° 42' 27.2", H390^米

2008年12月21日聞書

高い木に実る巨大米と小粒化

昔、稲はカボチャやココナツの実ぐらい大きく、背丈もココナツの木ぐらいの高さがあった。寡婦には夫がないので獲るのが大変で、棒でついたりして落としていた。面倒くさいので怒って稲に「あまりそんなに大きくなならないようにしなさい」と言い、稲を切り刻んだ。だから今もそのとき刻んだので、稲は大きいもの、小さいものと、粒が違い早稲、中間、晩稲のばらばらになった。

3 死体化生型の稲種起源

(1) 射殺した野鳥の胃袋から発見される稲種の起源と稲作開始の起源

① Houa Pang 県 Xam Tai 郡 Pung Siang 村 (Khmu 族)

N19° 46' 41.95" E104° 32' 03.9" H642^米

2008年2月20日聞書

昔、両親のいない男の子（孤児）がいた。たまたま、野鳥の猟に森に行ったとき、トンブールという野鳥を射殺した。家に持って帰ってきて解体したところ、胃袋にいっぱい粃が入っていた。男の子は、その粃を大切に保管した。

翌年、森を伐り拓いて焼いて自分の小さな畑を作った。その畑にあった白蟻の巣の周りに、トンブールの胃袋から出てきた粃を種粃として播いた。

秋になり良い稲が実ったので、自分で収穫作業をした。畑の面積は狭いのに、いくら穂を扱って収穫しても、扱いた後の穂にまた粃が実って、米倉二つ収穫してもまだ終わらなかった。

それで、妊娠している二人の女性が収穫の手伝いにやってきた。彼女たちは、チャカチャムという酸っぱい葉っぱに塩を付けて食べながら収穫作業をしていた。それでも、いくら穂を扱って収穫しても終わらなかった。初は、白蟻の巣から出てきて、扱った後の穂に飛んできてくっついていたのである。それを見て、二人の女性はチャカチャムの葉っぱで白蟻の巣の穴を塞いだ。そのときから初は穂に飛んでこなくなった。

だから、稲作儀礼には妊婦を参加させない。収穫作業も人の後からしか扱かせない。また、初を家の米倉に運ぶときも、稲の魂が寄ってくるときなので、妊婦は参加させない。

② Houa Pang 県 Thong 郡 Pieng Done 村 (Khmu 族)

N20° 06' 13.7" E103° 23' 18.8" H653¹⁵

2008年2月25日聞き

昔、貧乏な男の子のコンロック（両親のいない子ども）がいた。ある日、山に猟に行ったところ、たまたまトウンプルーという野鳥を撃ち取った。家に持って帰って解体したら、胃袋の中に稲の種を見つけた。

コンロックは、その年に焼畑を狭い面積拓いて、畑の中の白蟻の巣の周りにその種を播いた。その稲は成長が良くきれいに実って、米倉に初がどんどんひとりで飛んできて、米倉がいっぱいになった。ところが、妊娠している女性が米倉に来て、ラーカチャンという葉を食べていた手で稲を叩いたので、飛んでこなくなった。

それからコンロックはだんだん豊かになっていった。村人もその種をもらって栽培するようになった。この稲の種は、コンロックの奥さんがもらいに来て種にしたので、Hngo Mok（稲・妹）と名付けられた。

③ ルアンパバン県ゴイ郡ドーン村 (カム族)

N20° 40' 45.3" E102° 49' 43.1" H1177¹⁵

昔、ある村にコンロック（親が亡くなった少年）がいた。誰も面倒をみてくれないので、だんだん貧乏になっていった。コンロックは、焼畑の時期になると焼き畑がやりたいと思うが、焼き畑の道具も何も持っていないのでずいいた。あるとき、自分の父母のお墓の近くに行った。墓の近くには丁度休憩所があって、通る人が休憩をした。コンロックは、人が休憩したときに刃物を借りて、その周辺を少しずつ畑に伐った。次の日も、また次の日も同じようにして、ある程度の広さの畑を伐り開いた。燃やして種播きの準備ができたが、播く種初がなかった。

ある日、コンロックはモ（台付き弓）を持って森に鳥を撃ちに行った。そしてトウンプルーという鳥を撃ち獲った。家に持ち帰って料理をするため解体したら、胃袋の中に3粒の初が入っていた。コンロックはその初を種初にして畑に播いた。稲は順調に育って穂が出て熟れて収穫ができるようになった。

ある日、野性の姉妹の鶏が畑に出てきて稲を食べようとしたときに、コンロックが追い払ったため姉妹の鶏は逃げてしまった。その時、尾羽を落としていってしまった。コンロックは、それを拾って臭いを嗅いでみるととてもよい香りがしたので、家まで持って帰ってきた。

た。

ところが、姉妹の鶏はコン・プラヨン（娘・プラヨン）であった。娘たちは母親のプラヨンに「今日は、コンロックの稲を食べようとしていたら追い払われてしまった。あわてて逃げたら尾羽を落としてきてしまった」と話した。母のプラヨンは、「あの少年は貧乏なのにどうして彼の稲を盗み喰いなどするのか。少年と結婚して、彼を助けてやりなさい」と話して聞かせた。

そこで、ある日姉妹の鶏はコンロックの家までやってきた。コンロックの家は村の外れにあり、小さな家であった。姉妹の鶏が「あなたと一緒に住まわせてください」といって頼んだが、コンロックは「いや私は貧乏で、一緒に住もうにも家も食べ物もないから恥ずかしい」と答えた。姉妹の鶏は「大丈夫です。家も食べ物も私たちが何とかします」といって、一緒に住み始めた。それ以降、コンロックは家も立派になり、焼き畑もちゃんとできるようになり、豊になっていった。コンロックが手に入れた3粒の稲は、トウンプルーの胃から出てきたので、ゴッ・イャルー（稲・野性鶏）と呼ぶようになった。

ところが、トウンプルーは、その稲はイャルーではなくて「クロー・クー クロー・クー（貸したもの・私 貸したもの・私）」と鳴くようになった。

④ Luang Prabang 県 Kham 郡 Samtom 村 (Khmu 族)

N20° 26' 27.8" E102° 56' 51.9" H830^米

2008年3月5日閉書

昔々、世界中が洪水になり海だらけになった。そのとき、全ての人間が死んでしまった。しかし、神が、兄妹にだけには「高い山に入ってください」と言ったので、そのとおりにして世界中で兄妹だけが生き残った。

二人は、米もなかったので、芋とかを食べて生きていた。家を造って一緒に生活していた。大人になって結婚する年になったが、兄妹だから結婚できないでいた。すると、ある日、尻尾の長い黒い鳥が家のところに飛んできて、「兄妹であっても抱き合っても何をしていても良いのよ」と鳴いていた。しかし、一緒に住んでいても子どもはできなかった。

あるとき、ノックカウという見たこともない鳥が、いつまでもいつまでも、何日間も鳴いていた。兄は、やかましいと思ってモ（弩）で撃ち獲った。それを解体してみたら、見たこともない種が出てきた。それは、一種類一粒ずつ百種類も千種類もあった。

そこで、どんな種類か知りたくて、天日に干してから播いてみた。最初の年は、本当にきれいな稲が育って10kgの収穫があった。その稲はまだ食べずに、次の年も畑に播いたところ、10束以上の稲が穫れた。食べるために、踏み臼で搗いて精米して、最初は水と一緒にに入れて食べたら美味しかったので、たくさん食べた。また、別に蒸して食べるのもっと美味しかったので蒸して食べた。その後、稲作りをするようになった。

やがて、妹は子どもを孕んだ。しかし、生まれたのは瓢箪であった。子どもだとは思わず瓢箪だと思って、気にせず家にそのままにしておいた。ある日、畑の仕事から家に帰ってみると、妹はまだ畑に行っているのに、ご飯の準備や家畜の餌もすべて準備がされていた。

兄は、不思議だと思って屋根の上の方に隠れて覗いていた。そうすると、妹が生んだ瓢箪の穴から子どもが何人も出てきた。瓢箪の中では小さいのに、出てくると大きくなって、ご飯や家畜の餌などの準備をしていてくれた。兄は、それを見て瓢箪を潰した。そのとき出てきた子どもたちが、人類の元になった。

⑤ポンサリー県マイ郡モッチャラー村（カム族）

N21° 08' 24.7", E102° 40' 24.1", H753米

2008年12月22日聞き書

昔、父親が亡くなった少年「コンドロック」がいて、たまたま遊びの矢がほしくて母親に毎日せがんでいた。母親は面倒くさがって怒って「作れない。欲しければ墓に行つて父さんにお願ひしなさい」と言った。少年は泣きながら森の中の父の墓まで行きそこで矢を作ってくださいとお願ひをした。父親の精霊が人に変身して矢を作ってくれた。少年が喜んで帰つてきて遊んでいるとその矢が折れててしまった。また墓に行きお願ひした。何回も父親の精霊に会つてそのたびに矢を作ってもらつた。

子供が父親に戻つてきてくださいとお願ひしたが、父親の精霊は「それはだめだ。おれは精霊だから村に入れなさい家に入れなさい」と断つた。何度もお願ひをされたので父親の精霊は村に戻ろうと思つた。そして少年に「犬が怖いから村にいる犬を全部殺してからでないと村には戻れない」と言った。少年は村に戻つてほとんど全部の犬を殺したが、一匹の犬が母親が布を縫っている様子をして、同時に別の犬とセックスしている犬を母親がかくまっていた。少年にはその犬の姿が見えなかつた。

少年は、犬が居なくなつたと思つて、父親の精霊を呼びに行つた。父親の精霊が家に入ろうとしたら、犬も精霊もお互いに怖がつて不安になつた犬が吠え、父親の精霊が逃げようとした時、子供が追いかけて「待つて、待つて」と呼んだが、父親の精霊は森の奥に逃げてしまった。途中で父親は鹿の姿に変身した。子供は一緒になつていつた。途中で父が「もうあきらめろ。僕の角をあげるからいつてくるのはやめなさい」と言つて、角をあげ「この角を紐につないで引張つて帰りなさい。引かかつて引張れなくなつたらそこに住みなさい」と言つた。

少年は、父親の精霊に言われたとおりにした。父が作つてくれた矢も持つていたので、森に狩に行つて鳥を獲つた。撃ち獲つた鳥はトンプンという鳥で、解体したら胃袋の中に粉の種を見つた。毎回、毎回その粉を集めてそれを種にして畑を作つた。だんだんたくさんになつていつた。ある年、畑全体がきれいに実つたとき猿が稲を食べたり、畑を荒らしたりした。少年がワナを作つて猿をつかまえ「畑を荒らしているのは猿お前か。殺すよ」と言つた。猿は食べた稲を全部返すので命を助けてくださいとお願ひし、小さな太鼓を少年に渡した。少年が猿に「これは何か」と尋ねたら、何かお願ひするたびに叩くと、そのまま欲しいものが思い通りに出てくるからこれを使いなさいと言つた。稲が戻るようにお願ひしたら猿が荒らす前のようにみごとに元通りに復活したので猿を離した。

それから稲はよく実り、いくら収穫してもなかなか収穫が終わらない。そこにローイプラ

ヨン（川の精霊）の娘が人に変身して姿をあらわした。それからその少年に「これくらいの稲なのに収穫が終わらないね。私なら半日で終わらせられるよ」と話かけた。少年は「いやいや、なかなか終わらないよ」と答えた。「お前が半日で収穫できたら私がお前の所に行こう。できなければお前が私の所に来なさい」と言った。「いいですよ」と娘が答えた。それで収穫をはじめた。そろそろ終わりそうになったとき、少年が太鼓をたたいたので稲がまた元に戻っていった。結局女が負けて男のところにずっと住むことになった。だからカム族では、結婚したらほとんどの女は男のところに住みに来るのである。

⑥ウドムサイ県ムンサイ郡パクメン村（カム族）

N20° 33' 45.5" E101° 58' 22.2" H898^{標高}

昔、ある村に父も母も亡くなったひとりぼっちのコンロック（孤児の男子）がいた。コンロックは、ある日モ（弩）を作って、それを持って森に行った。タブンルという鳥を射殺して家に帰ってきた。タブンルを食べようとして腹を割いたところ、胃袋に一握りの粉が溜まっていた。

コンロックは、その粉を種粉にして畑を作ろうと考えたが、森を伐る鉈も粉を植える掘棒も何も道具は持っていなかった。それでもコンロックは畑を作りたくて、村から畑に行く道の途中のモックハルツ（休憩場所）に座って、その辺りを伐り開いて畑にしようと思っていた。そこで彼は、誰かがモックハルツで休憩するたびに、斧とか鉈を借りて竹や木を伐った。道具を貸した人達は、そこを立ち去ろうとする時になると「それを持ってこい」と言うので、コンロックは借りた道具を返した。その時、道具を貸した人達はコンロックの頭を軽く叩いた。燃やす時も火種を借りて、返すときには頭を叩かれた。タブンルの胃から見つけた一握りの粉とを種粉にして畑に播いた。しかし、その種だけでは足りなかったところ、コンロックが眠っているときに、霊がかわいそうだと思って種粉をくれた。その粉を種として播いた。収穫の時にも同じように他の人からベンホツもヤンも借りて収穫をした。それを返すときには頭を叩かれた。畑の米倉を準備するときも同じように頭を叩かれた。

コンロックが収穫の儀礼を行ったら、稲が畑から飛んできて畑の米倉はいっぱいになった。稲がいくら飛んできて畑の稲は減ることがなく、畑の米倉は4つ、5つと増えていった。村人は収穫を済ませて皆家に帰ってしまったが、コンロックは畑の稲が残っているので帰れないでいた。

村では、畑の米倉から村の米倉に粉を運び終わったら、祭りを行おうことになっていたが、コンロックが村に帰ってこないで、妊娠した女性2人が呼びに出掛けていった。妊娠した女性たちは彼に向かって「お前はなぜ村に帰ってこないのか。他の人達は皆作業を終わって村に帰ってきて、儀礼が出来ないのでお前の帰りを待っているぞ」と怒った。コンロックが「まだ収穫が終わらないので帰れない」と答えたところ、妊婦たちが「この葉っぱ（ラカチャンという葉）で稲を叩くよ。そうすれば早く収穫が終わる」と言って叩いた。そうしたところ稲は怒って飛んでこなくなった。畑にはまだたくさん稲が残っていたので、コンロックは穂を抜いて収穫を終えた。その後、コンロックはだんだん裕福になっていった。だから、

収穫儀礼の日には妊娠した女性は畑に入ることは許されない。

タンブルの胃から出てきた朶はゴッレンという晩稲の糯種で、霊がくれた朶はゴツ・ロイ（稲・霊）という晩稲の糯種である。

⑦ウドムサイ県フン郡プーラット村：旧ナムコム村（カム族）

N20° 17' 06.4" E101° 20' 36.6" H626^米

昔、カム族のある男が、オム（タケネズミ）を捕りに出掛けた。オムの穴を見つけて掘ったが、1日掘ってもとても深くて届かなかった。3日目か4日目に漸く掘り当て、オムを捕らえることができた。ところが、捕らえたオムがその男に向かって、「どうしてあなたは私を捕らえようとしているのか。私は、地球の奥まで穴を掘って熱水を出すのに、どうして私を捕らえるのか。私が出す熱水は洪水となって地球を浸してしまう。もし、お前が死にたくなければ大きな丸太を割り抜いて、その両口をフウツ（蜜蝋）で閉じなさい。そうすればお前は助かる」と話した。男はそれを聞いてオムを放してやって、村に帰りオムの言ったとおりに準備をした。

オムは男に言ったとおりに熱水の洪水を起こし、だんだん熱水が迫ってきた。割り抜いた丸太の中には二人しか入れる隙間がなかったので、男は誰を入れるか迷った。先ず、自分の母親を入れようと思ったが、母親は歳を取っていてやがて死ぬので入れても仕方がないと思って止めた。次に、自分の妻を入れようと思ったが、妻は別の家族の出身で、自分の身内でない（血のつながりがない）ので止めた。結局、自分の妹を入れた。外は熱水の洪水になって、他の人はもちろん母も妻も全部死んでしまった。

兄と妹の入った丸太は洪水の中を浮かんで、どこへ流れていっているのかも分からない。洪水が収まったかなと思って外を見たくなるとは、ヤマアラシの針で蓋の蜜蝋を突き、水が入ってきたらまだ収まっていないと思い、穴を塞いだ。それを繰り返して、最後に水が入らなくなったので、蜜蝋を破って外に出た。外に出てみると誰もいなかった。

そこで、二人で家を建て始めた。暫くすると、二人とも結婚しようと思うようになった。兄は妹に「私も結婚するのでお前も結婚しなさい。相手を探しに行きなさい」と言って、相手を捜しに出た。しかし、二人とも相手を見つけることができなかった。妹が向こうに立っている男が居ると思って走っていっても自分の兄であった。また、兄が向こうに立っている女が居ると思って走っていっても自分の妹であった。結局、二人とも疲れてしまって、相手を見つけることはできなかった。

その時、ノッタコックという鳥が「トックコック、トックカイカイ（何れも鳴き声）
プレイ・ナー・モック（兄貴・と一緒・妹） スルッコック（抱き合う：結婚する）
ヨッター（しなさい）」と鳴いた。それを聞いて二人は鳥が言うように結婚した。やがて妹は妊娠した。しかし、1年しても2年しても子供は生まれなかった。漸く3年目になって生まれた。しかし、生まれてきたのは人間ではなかった。何の実かは分からないが、クルンムンという実に似た南瓜か瓢箪ぐらゐの大きさの実であった。仕方がないのでそのまま家に置

いていた。

ある日、兄は1人狩りに出掛けて行った。モクチョンベツという山は、雌雄、100種類もの多くの野生の鳥や、野生の鶏、野生の動物がいっぱいいるところであった。その山は高かったので洪水に遭わなかったのだろう。兄はそこでタワーという網を使って、クットーンという鳥を捕った。それを家に持って帰って料理をするため解体したところ、胃袋のなかにいっぱい粉が入っていた。その粉は、ゴツ・ワーン、ゴツ・モン、ゴツ・ジィンム、ゴツ・エツ（別称ゴツ・ヒヤン）、ゴツ・ルアンの5種類であった。

兄は、その粉を種粉として、家の近くの森の白蟻の塚の周りを伐り開いて、焼いて畑にして播いた。それが実って収穫を始めた。そんなに広くもなく、いくつかの株しかないのに、収穫しても収穫しても終わらない。家に帰って再び蟻塚に行くと、まだ穂の粉が減っていない。収穫を続けているうちに疲れてしまった。その時、シン・チャラン・コイという鳥が、「ファン・プップ（鳴き声） フウツ・リッド（蜜蠟・閉めなさい）」と鳴いた。兄は蟻塚の頂点に蜜蠟を付けた。そうしたところ、穂が無くなってしまった。

妻の妹が家の周りで仕事をしていると、誰かの話し声が聞こえてきた。家の中を確認しても誰もいなかった。その後、そんなことが何回も続いた。ある日、妻は怪しい、クルムンではないかと思って、スルネー（竹細工用の金串）を火で焼いて突き刺した。そうしたところ、中からたくさん人間が出てきた。最初に出てきた人たちは黒く焦げていて、次第に白くなっていった。出てきた人たちは、順番に倒木に並んで腰掛けた。ところが、その倒木が重みのために折れて、人々はひっくり返ってびっくりして、声を上げて話を始めた。その声は別々の言葉であった。それが今の別々の民族の言葉になった。最初に出てきたのがラメツ族の人で最も黒く、二番目に出てきてたのがカム族で次に黒かった。跡はだんだん白くなり、ラオ族とかいろいろな民族になった。最後に出てきたのがモン族で、だから彼らは最も白いのだ。

⑧ルアンナムター県プーカー郡プーラット村（カムユアン族）

N20° 36' 30.2", E101° 06' 11.1", H695[㍻]

2009年1月5日聞き

「ポンコーン トウンプーン モ マプウツ ルーカンパー」

昔両親のいない男の子（ポンユール ※そのように呼ぶ）がいた。モツ（弓）でトウンプーンという鳥を撃ち獲った。解体すると胃袋から3粒の粉がでてきた。弟に渡すと、弟はその2粒を飲み込んでしまった。兄は弟を殺して解体して2粒の稲を取り戻した。この2粒の稲を栽培したら1年目は一握りの収穫があり、毎年栽培量を増やしていった。

⑨Luang Prabang 県 Kham 郡 Ombring 村（Mhong 族）

N20° 24' 24.6" E102° 59' 24.3" H940[㍻]

2008年3月4日聞き

これは霊と人間がお互いに話が出来た時代の昔昔の話である。
あるところに母親も父親も亡くなってしまった一人ぼっちの青年がいた。ある日その青年は

森の中に入り滝のところにやってきた。そのとき羽根のついた美しい3人の女の人が天から飛んで降りてきた。滝壺で水浴びをしているのを見かけた。女たちは水を浴びる前に自分たちの体から羽根を抜いて水浴びをしていた。その姿がとても美しいので、青年は物陰に隠れてのぞき見をした。とても美しいのでその女性を自分の妻にしたいと思った。それで青年は何日も何日も見に出かけた。その女性たちは水を浴びたら再び羽根を身につけて天に飛んで帰って、また飛んできて水浴びをしていた。

青年は、いつもいつもその女の人のことを自分の妻にしたいと思うようになった。そんなある日、ヨシャウという精霊が、青年にその女の人を妻にする方法を教えてくれた。ヨシャウは「お前がもしその女を奥さんにしたいなら、女が抜いておいている羽根をどこかに隠してしまったら、女は天に飛んで帰ることができなくなるから奥さんにできるよ」と教えてくれた。

青年は精霊が教えてくれたとおりに、一人の女の羽根を隠してしまった。3人の美しい女たちは水浴びをして、羽根をつけて天に飛んで帰ろうとした。3人のうち2人は羽根を身につけて天に飛んで帰ったが、一人だけは羽根がなくて天に飛んで帰ることができずに困っていた。それを見ていた青年は、その女性に「大丈夫ですよ。私と一緒に行きましょう」と声を掛けた。女はその青年と一緒に青年の村に行き、青年と結婚して妻になった。

時間が過ぎて二人の間に二人の男の子ができた。夫は毎日山の畑の仕事に出かけ、妻は家で仕事をしていた。夫は「家の天井裏に上がってはならないよ」といつも妻に注意し、畑に出かけていった。実はその天井裏は羽根が隠してある場所だったのである。妻は夫の言うとおりに、天井裏には上がらなかった。

しかし、子供たちが天井裏に上がって遊んでいると、羽根をみつけた。そして母親にそれを見せた。妻は「なるほど夫が私の羽根を隠して自分と結婚したのだ」ということに気付いた。早速妻はその羽根を身につけて、子供たちにむかって「私は天に飛んで帰るので、これからあなたたちはお父さんと一緒にくらしなさい。そのことをお父さんに伝えなさい」と言い残し、天に飛んで帰ってしまった。夫は畑から家に戻ってきて、妻がいなくて「お母さんはどこに行ったのか」と子供たちに聞いた。子供達は母親に言われたとおりに父親に伝えた。父親は怒って「お前たちはお母さんの所まで行って、お母さんを連れ戻してきなさい」と子供たちに言った。

子供たちは、どうやって母親の所に行ったらよいかわからずに困って泣いていた。そのときヨシャウが子供たちに母親のいるところまで行く方法を教えてくれた。「リー（胡瓜）の蔓をたどって登っていくと、そのつるが終わるところにお前たちのお母さんがいるよ」と教えてくれた。子供たちはヨシャウが教えたとおりに、リーの蔓をたどって天に登って行って母親に会った。子供たちは「お母さんを連れ戻してこい。そうしなければ殺す」と言われたと母親に言った。母親は「いやいや、それはお母さんのお父さんに許可をもらわないと戻れません。お祖父さんの許可をもらいましょう」と言った。

そこで、母親と二人の子供はお祖父さんの所に許可をもらいに行った。お祖父さんは「そ

それはだめでだ」と言ったが、「そういうことなら（お母さんを連れ戻したいなら）私の出す問題を解決しなさい。それが出来たらお母さんをつれて戻っていいよ」と言った。まずお祖父さんは子供達に「1日で畑にする森の木を伐り倒すことができればいいよ」と言った。子供たちはどうすればいいのかかわからず、困って泣きながら母親に「私たちは小さいので広い畑を1日で伐採するのはできない。どうぞればいいの」と相談した。母親は「大丈夫だよ。あなたたちは立っている樹に1回ずつ伐りつけなさい。そうしておけば、お母さんが風で倒してあげるから大丈夫だよ」と答えた。そこで子供達は母親に言われたとおりに森に行き、各々の樹に1回ずつ伐りつけた。そうしたら1日で切り倒すことができたので、お祖父さんに伐り終わったことを報告した。

しかし、お祖父さんは「まだまだだめだ。それを1日で燃やしなさい。そうでないとお母さんを連れ戻ってはならないよ」と言った。二人の子供は畑まで行って燃やした。そしてお祖父さんに1日で燃やし終えたことを報告した。

ところが、お祖父さんは「まだまだだめだ。畑に1日で種子を播きなさい。そうでないとお母さんを連れ戻ってはならないよ」と言った。子供たちは困って泣きながら母親に「私たちは小さいので1日で種子まきすることはできないよ」と相談した。すると、母親は「大丈夫だよ。地面の上に、穴だけをあけなさい。お母さんが風に種籾をまきあげさせて穴に入れ、種播きさせるから大丈夫だよ」と言った。子供たちは母親が言ったとおりに穴をあけただけで、1日で種播きを終わることができた。それでお祖父さんに1日で種まきができたことを報告した。

しかし、お祖父さんは娘（子供たちの母親）が子供たちと戻ってもらいたくないので、今度はお祖父さんは「播いた種子を全部もとに戻しなさい」と命じた。そこで、困って母親に相談すると、母親は「種子の入れ物を畑に準備すれば全部風に吹かせて戻すから大丈夫だよ」と言った。ところが、その中の数株を鳥（鳩）が食べてしまって、最後全部戻らなかった。

それで、また母親に相談すると「カ（弓）のネン（矢）で撃って、胃袋から取り出しなさい。そして、入れものに入れて全部戻したとお祖父さんに報告しなさい」と言ったので、そのとおりにした。お祖父さんは「まだまだだめだ」と言って次々に問題を出していった。お祖父さんは娘に戻って欲しくないので、次々に課題を出し続けた。

次に「お前たちとかくれんぼをしよう。お前たちが私を探し出したり、私がお前たちを探したりしよう」と言った。先ず、お祖父さんが隠れた。子供たちは、母親に「どこを探せばいいのか」と聞いた。母親は「大丈夫。お前たちが梅の木のところに行って、一つしか実のなっていない木の実を食べたらいいよ」と言った。そのとおりにした。しかし、どうしてもとれないので石を投げて落として取ろうと何回も試みた。「おいおい、お前たちはもう石を投げるのをやめなさい。私に当るよ」と、お祖父さんが声をあげたのでお祖父さんの姿を見つけた。

そうしたら、お祖父さんは「じゃ次はお前たちが隠れて私が探す番だ。隠れなさい」と言

う。子供たちは母親に相談した

母親は「大丈夫だよ」と言って、二人を鉢に変身させた。母親は刺繍している自分の横にその鉢を置いた。お祖父さんが見つかる心配があったので、別の場所の踏み臼のくぼみの中に入れた。お祖父さんは探しても見つけることはできなかった。お祖父さんは「もう見つけられない。疲れた。もう出てこい」と言った。子供たちは「お祖父さん、臼のくぼの中に隠れていたよ」と言って出てきた。

お祖父さんは「これからまた私が隠れます。お前たちは探さない」と言って隠れた。それから子供は母親に相談に行った。母親は、「お前たちは瘦せている馬を見つけて乗ったらよいよ」と言うので、子供たちはそのとおりにした。お祖父さんは瘦せた馬の姿に変身していた。子供達は瘦せ馬を見つけてまたがって「ハイハイ」と叩いたりした。「おー痛い、やめなさい」という声とともに、お祖父さんは人間の姿に戻って現れてきた。

お祖父さんは「次はまたお前たちが隠れなさい。私はもう一度探します」と言った。子供達は母親に「どうしようか」と相談した。母親は「大丈夫」と言って、刺繍の針に二人を変身させて、胸の襟のところに付けて隠したが、お祖父さんに見つけられるのが心配だったので、家の囲炉裏の中に投げ込んだ。お祖父さんが探すのをあきらめて「ああ疲れた。もう出てきなさい」と言った。子供がお祖父さんに「僕たちは囲炉裏の所に隠れていたよ」と言って出てきた。

それから、お祖父さんは「じゃ、お前たちは明日の朝、川の所で待っていなさい。私たちが二人（祖父と母親）で行くから、あそこに樹とバナナが1本ずつあるので、バナナの木を伐って、山の樹に立てかけなさい。そうしたら母さんを連れて帰ることができるよ」と言った。逆に、母親は「樹を伐ってバナナの木に立てかけなさい。そうしたら母さんはあなたたちと一緒に帰れますよ」と言った。翌朝二人は川沿いまで行った。長男は「お母の行ったとおりにしようよ」と言い、次男は「お祖父さんが言ったとおりにしよう」と言い、喧嘩になった。次男は小さくてわがままだったので、バナナの木を伐り倒してしまった。実は、バナナの木は母親であった。お祖父さんが出てきて「お前たちはお母さんを殺してしまったね。もう連れて帰れませんよ」と喜んで笑いながら言った。

母親は死ぬ前に「お母さんのいうとおりにしなかったのでこうなってしまったよ」と言い、長男に「透明な水の川の流れて上流に行き、猿と結婚しなさい」、次男には「言うことをきかなかったので、濁った川の上流にのぼって行き、虎と結婚しなさい」と言った。二人は母親の言ったとおりにした。長男が透明な川をのぼり、猿の娘と結婚した。次男はその通りにしたが、途中で日暮れ暗くなり地面で寝ているといろいろなことが恐いので、樹上で寝ていた。翌日太陽が出て、太陽の光で自分の影が水面に映った。川で魚やカニを探して食べるダーポンゾンという精霊3人がその影をみて食べ物と思って捕まえようとした。なかなか捕まえられなかった。それを見ていた次男は、木の上で我慢できずに笑い声をあげてしまった。その声を聞いてダーポンゾンは木の上にいる次男に気付いた。ダーポンゾンは次男に「下りてこい」と言い、次男は「いや、お前たちが恐いので、ここにずっといる」と言っ

た。精霊は「じゃ私のお祖父さんを連れてきてお前が下りるようにする」と言った。精霊は虎をつれてきた。虎は次男を降りさせるために木に登ってきた。次男は虎を刀で刺した。虎は落ちて死んでしまった。

2回目、精霊が熊をつれてきた。次男は同じようにして山刀で熊を刺した。熊は落ちて死んでしまった。次に精霊は穴熊をつれてきた。同じ事をしてまた穴熊は死んでしまった。それから精霊は自分が登って捕まえようとしたが、3人とも次々に死んでしまった。それでも次男は降りてこなかった。

殺されて落ちたものに蠅が飛んできた。蠅が「みんないないよ。下りてこいよ」と言った。次男は「怖いから下りません」と言う。「みんな死んだから恐くないよ」と蠅が言うが、それでも男は信じなかった。蠅が死体についていたウジ虫をもってきて次男に見せた。それで次男は信じて木の上から下りてきた。

次男は引き続き歩いていこうと思ったが、どちらの道に行こうか迷った。次男は精霊が虎をつれてきた道に進んで行った。途中に大きな石に出くわし、その石の上にヤオ族の女性二人がいた。それを見た次男は「お前たちは精霊なのか、人間なのか」と尋ねた。女性たちは「私たちは人間だ」と答えた。次男は「そしたら私と一緒にいこう」と誘った。女性二人は「いや、私は虎のものになっているので、虎にわかったら怒って食べられてしまう」と言った。次男は「虎は私が殺したから大丈夫だよ」と言った。女性二人は、あるヤオ族の家族が祖先精霊の儀式をやらないから、祖先精霊が怒ってその家の娘を虎に売ったその娘であった。次男の言ったことを聞いた二人の女性は、次男と一緒に進んで行った。

途中に川があり、瓢箪で水を汲んでくる猿の女性を見た。次男がその猿に「お前は何をしにきたのか」と聞いた。猿は「夫の弟が死んだので儀式をするために水を汲みにきた」と言った。次男は「瓢箪を腹の所まで持ち上げなさい。私は矢で撃つから」と猿に言った。次男は弓で撃った。矢は背中まで貫通して猿は死んでしまった。実はその猿は兄の妻であった。長男は自分の弟が死んでしまったと思い、何かの儀式をしてあげようと思って妻に水汲みに行かせたのであった。

次男は引き続き歩き、長男の家の近くまでたどりついた。二人の女性を籾倉のところに隠してから長男に会いに行った。次男と長男は出会うことができた。長男は次男に「ここに来る途中で僕の妻を見なかったか」と聞いた。次男は「いいえ、誰にも会わなかった。ただ猿にあったので殺した」と答えた。長男は弟に「いや、それはよくなかった。その猿は私の妻だったんだよ。お前の義理の姉だったんだよ」と言った。次男は「大丈夫だよ。僕が二人の女性を連れてきたので、一人ずつ妻にしましょう」と言った。二人の娘のうち一人は美しく、一人は醜かったので、次男は美しい娘の顔を炭の粉で塗って、その娘が美しいと長男にわからないようにした。それで美しい方を自分の妻に、醜い方を長男の妻にしようとした。しかし、兄は「私の亡くなった猿には親戚や母親が活着ているので、他の娘と結婚したことがわかったら必ず怒られる」と心配した。

しかし、次男は「大丈夫、よい方法がある」と言って、モン族の織物の麻の紐で縄をつ

くって一束（固まり）にした。その麻紐を死んだ猿の肩にのせて猿の両親へのお土産の形にして、バツタがたくさんいる山の上に置いた。それから長男と次男は猿の妻の両親の所まで行った。長男が「私の妻はここに帰ってきましたか」と聞いたところ、「いや、来ないよ」と両親が答えた。そこで長男は、「妻があなた方に縄をお土産に持って行くと言って出かけたので、ここにいると思って来てみた」と言った。「妻はどこの道を通って来たのか」と長男に聞かれた次男は「バツタがたくさんいる山を通っていたよ」と言った。それでは探しに行こうと両親が言った。一緒に探しに行ったらバツタの山に行って娘を見つけた。その娘の姿は目、耳、頬がバツタに食べられている状態であったので、「娘はバツタに食べられた」と言って両親は怒った。猿の両親は自分の娘がバツタに殺されたと思って、猿たちを集めて朝早くからバツタ狩りをした。殺したり食べたりした。バツタは、太陽が出ていなかったもので、元気がなく飛んでいなかったので簡単に殺された。バツタたちが「おい猿さんたち、太陽が出るまでもう少し待って下さい。太陽が暖かい掛け布団をくれるから、その布団をもらってから私たちを叩いたり殺したりしてくださいよ」と言った。猿たちはそれを聞いて、翌日太陽が出てからバツタを殺そうとした。太陽が出たらバツタは元気がでてきて良く飛ぶことが出来るようになった。飛んでいるので猿はバツタを叩いたり、殺したり簡単にできなかった。バツタが猿の頭に飛びついたり、とまったバツタを叩いたりして、猿の仲間が死んだりした。

そこで、長男と次男はバツタと一緒に猿たちを全部殺した。次男は「殺した猿を食べよう」と長男に言った。長男は「彼らは私の妻の親戚だから絶対に食べない」と断った。次男はあなたが食べなくても自分は食べると言って、背負い籠を作ってそれに猿の死体を入れて家まで帰ってきた。火をおこして、毛をとったりして解体して料理を作った。次男が料理している間に長男は眠ってしまった。次男は猿の料理をたくさん食べて一口も残さなかった。その残りを眠った長男の口に入れて食べさせようとした。長男は目覚めて「これは何の料理か」と聞いた。次男は「これは猿の料理だ」と言った。「おいしそうだね」と長男は言った。食べてみたらおいしかったので、「もうないのか」と言ったら、次男は「もうないよ。猿の料理を作ったり食べたりしているときお前が眠っていたからもう残りはないよ」と答えた。

⑩ ルアンナムター県ムンシン郡ヤールー村（アカ族）

N21° 08' 05.5" E101° 08' 55.1"

昔、アカ族の人は稲は持っていなかった。しかし、稲が欲しくて鳥に「お前が稲を探して来たら、僕は育ててお前はそれを食べてよい」とお願いした。昔は、鳥と人間はお互いに話ができて、友達付き合いができていた。その鳥の名は、ハチャという。

ハチャはお願いされたので、どこかへ探しに出掛けた。そして、人の稲を盗んだ。その人は、「お前は俺の稲を盗んだろう」と責めた。ハチャは、「いや、違います。私は何も取っていない。何もありませんよ。僕の胃袋の中を確かめてください」と言って、吐いて見せた。何も出てこなかった。実は、背中の羽根毛の中に隠していた。そうやってアカ族のところに稲を持ってきた。その稲は、シーパー、パトゥ、ロクー、プレー、アチャーの5粒で、総て

焼き畑に植える稗の種類であった。その稲を受け取った人は、それを種籾にしてだんだん増やしていった。

だから、この5種類の稲は、セ・シー（母・稲）と呼ぶ。また、ハチャは今でもこうした稲をよく食べるが、アカはそれを許して殺したりはしない。

⑪ルアンナムター県プーカー郡トンラット村（アカコピー族、アカジュチャー族）

N20° 55' 08.8", E101° 00' 34.4", H954^米

2009年1月3日聞き書

「ホフー（ハックトゥ） トウツトゥー トウツトゥー ミオチョッドゥー」という話

昔人間は稲（米）がなくてイモとかを食べていた。ホフーという鳥は「ホフー（ハックトゥ） トウツトゥー トウツトゥー ミオチョッドゥー」と鳴く。

あるとき、この鳥が「稲が土の中にありますよ」と教えてくれた。人間は「じゃ、お前がそれを盗んでこい」とホフーに命じた。ホフーは人間の言ったとおりに泥棒しに行った。稲を盗んで帰る途中に、その稲を見守っているミオソトゥーという背の低い精霊が追いかけてきて、「お前が稲を泥棒したのではないか」とホフーに問いかけた。ホフーは「違う」と嘘をついたが、胃袋を検査されて稲を全部ミオソトゥーに取り返されて、持っていかれた。それでホフーは「帰ってくる途中でこうこういうことがありました」と人間に報告した。

人間は、次にハチャー（稲を多勢で食べる鳥）という鳥にお願いした。その鳥がまた泥棒しに行って、首の羽根の中に隠してきた。途中でまた ミオソトゥーに稲を盗んでいないかを検査された。ハチャーは「そうじゃない」と言った。胃袋を検査されたが、首の後ろの羽根の中に隠していたので見つからなかった。

ハチャーは人間に稲を盗み出すことができたが、途中の溜池で水を飲もうとした。水を飲んだときに池に稲が落ちてしまった。そういうことがあったことを人間に報告し、「池に落としたので持ってこれなかった」と報告した。

そこで、人間はあひるにその稲を取ってこいと命じた。アヒルがその池まで行ってその稲を取って人間に渡した。そのときから人間はその種をもとにして稲作を始め、稲を増やしてきた。そのとき盗んできた稲は、糯か粳かわからない。アヒルは鶏の代わりに供え物にすることができる。

こうした種類の話は、アプー・アダ・ドゥー（おじいさん・お父さん・古いこと）と呼ぶ。

⑫ボケオ県ムン郡ボンサワン村（アカアグイ族）

N20° 44' 39.3", E100° 28' 22.4", H620^米

2009年1月9日聞き書

「ハジャ」という話

昔は人間の世界では稲がなかった。ある日山みたいな高い所で神様が稲を天日干ししているのが人間に見えた。人間は取れないのでハジャという野鳥に持ってきてもらうように頼んだ。

ハジャは稲を飲み込んで持ってこようとした。しかし途中で神様が「お前は稲を飲み込んで持っていこうとしているのではないか」と言って胃袋を検査したが、ハジャは胃袋の反対側の首の後ろに隠していたので、神様は見つけることはできなかった。それでハジャは稲を持ってきてくれた。

その稲を種子としてアカ族は稲作を始めた。その稲の名前はわからないが、粳米であった。今あるかわからない。

4 鳥の巣からもたらされる稲種

①ウドムサイ県ムンサイ郡パクメン村（カム族）

N20° 33' 45.5" E101° 58' 22.2" H898^米

ゴッインムの由来

昔、この村に主人も死んでしまった独りぼっちなマボイス（寡婦）が住んでいた。彼女は、独りで焼畑を行ってきた。マボイスは貧乏ではあったが真面目に働き、母から教えてもらった儀礼もそのとおりに行ってきた。ある日、畑の作業を行っていると、タブンルという野鳥が、畑の脇にあるタネック（ラオ語名マイホック）という竹の枝に巣を作って住んでいた。

いよいよ収穫の日になった。彼女は、鳥の巣が気になって見に行ったところ、タブンルは飛び去って行ってしまった。鳥の巣を見てみると、巣の中には30粒の籾が残されていた。彼女は、卵があるはずなのにおかしいなと思いながらも、その30粒の籾をもらってきて、大事に保管しておいて翌年の種籾にした。それを畑に植えたところ、収穫の時にベンホッ（稲扱き用の小さな腹籠）一つの量に増えた。その翌年、ベンホッ1つの籾を種籾にして畑に播いたら、ヤン（大きな背負い籠）で40個分の収穫があった。

ある日、彼女は夢を見た。見た夢は、タブンルが飛んできて「あなたは、毎年同じように儀礼をしてくださいね。わたしは、あなたに種籾を持ってきてあげたのですから」と言った。彼女は、その後タブンルに言われたとおりに儀礼を続けたので、毎年毎年稲籾がよく穫れた。

タブンルの巣から見つかった籾は、今もある籾殻が赤っぽいゴッインムという晩稲の糯の種子である。

5 穀物盗み型の稲種起源

(1) ネリヤ型・魚が盗んでくる稲種

①シェンクアン県カム郡ポーシー村（ムイ族）

N19° 37' 44.1" E103° 42' 59.0" H520^米

魚が取り戻し復活する稲種

昔、ある子供のたくさんいる家族が稲を収穫するときに、大人たちは稲を大切に扱ったが、子供たちが稲を川に投げたり、森に捨てたり、稲で遊んだり、足で踏みつけたり、ご飯を土の上に落としたりして、粗末に扱ったので、稲が怒って飛んで逃げて行ってしまった。逃げた稲は、川に隠れたり、森に隠れたりした。また、畑から鳥が持って行ってしまったりして、

だんだんに村から稲がなくなり、食べ物がなくなってしまった。

その後、ある人間が、ノン・サパン（池・名称）に隠されていることを知った。しかし、人間は取りに行けないので、パ・カーン（魚・名称）に取ってきてくれるように頼んだ。パ・カーンは「分かりました。持ってきます」と言って、稲を持ってきてくれた。

だから、種播き始めの儀式である「ヘツ・サック・カオ・ハイ（儀礼の始め・刺す・稲・畑）」のときに、竹の魚の模型を作って吊り下げる。また、収穫始めの儀礼である「ウン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）」のときには、次の言葉を述べる。

m i i p a p h o k y u u h u a h a t

居る 魚 名前 ～に 頭 中洲

m i i p a c h a t y u u v a n g

名前 深み

k o a h a i m a x o m k h u a n k h a o

～も ～させる 来る 見て褒める 魂 稲

(2) ネリヤ型・鳥が盗んでくる稲種

① Houa Pang 県 Thong 郡 Houayd Teun 村 (Yao 族)

N20° 16' 38.3" E103° 22' 13.7" H1136^海

2008年3月2日聞き書

昔々、粳粒は親指ほどの大きさであった。人間が稲作りをしなくても、米倉を作って準備をして稲を呼びに行くと、稲はひとりでに米倉に入ってくるものであった。

ある夫婦がいた。男主人が稲を呼びにゆき、奥さんは米倉を掃除することになった。ところが、奥さんは米倉を掃除せずに不倫をしていた。男主人が稲を呼んでから米倉の掃除を始めた。だから、稲がやってきたのに間に合わなかった。しかし、稲が米倉に入ってくるので奥さんは叩いた。叩かれた米は怒って逃げた。遠い遠い海の向こうに逃げた。だから、どんな動物も取りに行けなかった。

ところが、ノックマイチャアーという野鳥だけはそこに取りに行けるといっているので、頼んで取りに行ってもらった。ノックマイチャアーは、小さな木の葉に乗って取りに行ったが、稲は帰らないと言った。そこで、ノックマイチャアーは粳の隅っこを少しだけ嚙って帰ってきた。人間はその米を種にして稲作を始めた。だから、今のようにこんなに小さい粳になった。ノックマイチャアーは、自分が持って帰ってきたので米を食べているけれど、全部を食べずに人間が食べる分は残しておく。

②ボケオ県ムン郡ナムガム村 (ヤオ族)

N20° 38' 29.4", E100° 27' 36.5", H495^海

2009年1月10日聞き書

昔、海があつて 右と左に陸地があつた。一方の陸地が3年間、雨もなく稲が枯れてしまった。人間は住めなくなって筏をつくって反対側にやってきた。人間は種粳がなくてノッ

クメエという野鳥に「稲をもってこい」と言った。それはノックメエと同じ大きさの稲粃だから持って来ることができなかった。粃の上だけを持ってきた。これを種にして稲作を始めたので稲は小さくなった。だから稲が実ったらノックメエが直ぐに食べに来る。その種は糯だか粃だかわからない。

(3) ネリヤ型・鼠と猫が盗んでくる稲種

①ルアンパバーン県ナムバック郡ナムガ村（タイルー族）

儀礼的な播種祭を行う聖なる畑に、トウカオヘツという小さな小屋をたてる。小屋の足下に左回りに、月、火、水、木、金、土、日の7株を植える。この時、竹で魚の形を編んで、小屋の四隅に吊り下げ、中には薫製した魚を供える。

これは、嘗て鼠が種粃を盗んで逃げて種粃がなくなった時、仏陀が体の垢で猫を作って鼠の元に遣わし、種粃を取り返してくれたという伝承に基づいている。だから、この辺りの人々は、猫がハイ（焼畑）を守ってくれると言って「猫神」を祀って信仰しているという。したがって、猫の好物の魚を供えるのだという。

②ヴェトナム・ライチョウ省ホントウ県ホントウマン村（黒ザオ族）

ナオ（鼠）の話

昔、黒ザオ族にはお米があったが、あるとき種粃はタンクツという男（老人）に盗られて、ホワイ（海の向こう）に行ってしまうと、次の年からお米が作れなくなってしまった。

そこで、人々はナオ（鼠）に「ホワイに行ったら種粃を持って帰ってきてください」と頼んだ。ナオは、ホワイまで行って種粃を食べて持って帰ってきた。そのナオをモロミエー（猫）が食べて、黒ザオはそのモロミエーから種粃をもらい、再び稲を作れるようになった。だから、お米は祖先とナオとモロミエーに先に食べさせてから、人間はその後に食べる。

(4) ネリヤ型・犬が運ぶ稲種

① Luang Prabang 県 Kham 郡 Ombring 村 (Mhong 族)

N20° 24' 24.6" E102° 59' 24.3" H940^米

2008年3月4日聞書

洪水漂泊兄妹始祖・犬が運ぶ稲種起源

昔あるとき地球全体が洪水になった。ほとんどの生物が死んでしまい木も稲も人間も動物もいなくなった。ところが、一組の兄と妹がたまたま大きな太鼓の中に隠れていた。二人は洪水がおさまったときに生き残って太鼓の中から出てきた。しかし外には誰もいない。それでどうしても結婚したいが、相手がなくて結婚出来ないことがわかった。

それでもどうしても子供を作らなければならない。そこで兄はタロイモに似ているブルン・コオ・チョツという植物の葉を妹の性器の上において、その葉っぱごしに妹とセックスをした。だからブルン・コオ・チョツの葉には今でも穴があいている。それはそのときの兄の男根のあとである。

そうして一人子供ができた。その子供を殺してバラバラに解体してあちこちに捨てた。と

ころがその一つ一つから人間が生まれてきた。それがモンの人たちのいろいろな名字になった。捨てた子供の死体の肉の一つ一つから今のモンの人たちの一つ一つの名字ができた。だからお互いの名字で結婚し、今のようにモンの人たちが増えてきた。

ところが、木も水も稲もなかったので、犬にお願いし、天まで行ってもらい、いろいろな木、水、稲の種子などをもらって降りてきてもらった。犬は稲の種子を持って降りてくるときには毛にいっぱいつけてきたが、途中川を泳いできたので、首の後ろに2、3粒だけしか残っていなかった。それが、プレシュワ（粳種：ラオ語名カオチャオ）、プレブラオ（糯種：ラオ語名カオニャオ）の両方の種である。犬が持ってきたその種子をもとにして稲作をはじめた。だからモンの人間の間では犬を殺したり、食べたり、売ったりしてはならない。

(5) 他の人間界型・野鳥が泥棒した稲種

①ルアンナムター県ムンシン郡ヤールー村（アカ族）

N21° 08' 05.5" E101° 08' 55.1"

昔、アカ族の人は稲は持っていなかった。しかし、稲が欲しくて鳥に「お前が稲を探して来たら、僕は育ててお前はそれを食べてよい」とお願いした。昔は、鳥と人間はお互いに話ができ、友達付き合いができていた。その鳥の名は、ハチャという。

ハチャはお願いされたので、どこかへ探しに出掛けた。そして、人の稲を盗んだ。その人は、「お前は俺の稲を盗んだらう」と責めた。ハチャは、「いや、違います。私は何も取っていない。何もありませんよ。僕の胃袋の中を確かめてください」と言って、吐いて見せた。何も出てこなかった。実は、背中の羽根毛の中に隠していた。そうやってアカ族のところに稲を持ってきた。その稲は、シー・パー、パトゥ、ロクー、プレー、アチャーの5粒で、総て焼畑に植える粳の種類であった。その稲を受け取った人は、それを種籾にしてだんだん増やしていった。

だから、この5種類の稲は、セ・シー（母・稲）と呼ぶ。また、ハチャは今でもこうした稲をよく食べるが、アカはそれを許して殺したりはしない。

(6) 土中型・野鳥が泥棒した稲種

①ルアンナムター県プーカー郡トンラット村（アカコピー族、アカジュチャー族）

N20° 55' 08.8", E101° 00' 34.4", H954^米

2009年1月3日聞き書

「ホフー（ハックトゥ）トゥットゥー トゥットゥー ミオチョッドゥー」という話

昔、人間は稲（米）がなくてイモとかを食べていた。ホフーという鳥は、ホフー（ハックトゥ）トゥットゥー トゥットゥー ミオチョッドゥーと鳴く。

あるとき、この鳥が「稲が土の中にありますよ」と教えてくれた。人間は「じゃ、お前がそれを盗んでこい」とホフーに命じた。ホフーは人間の言ったとおりに泥棒しに行った。稲を盗んで帰る途中に、その稲を見守っているミオソトゥーという背の低い精霊が追いかけて

きて、「お前は稲を泥棒したのではないか」とホフーに問いかけた。ホフーは「違う」と嘘をついたが、胃袋を検査されて稲を全部ミオソトゥーに取り返されて持っていかれた。それでホフーは、「帰ってくる途中にこういうことがありました」と人間に報告した。

人間は、次にハチャー（稲を多勢で食べる鳥）という鳥にお願いした。その鳥がまた泥棒しに行って、首の羽根の中に隠してきた。途中でまたミオソトゥーに稲を盗んでいないかを検査されたハチャーも「そうじゃない」と言った。胃袋を検査されたが、首の後ろの羽根の中に隠していたので見つからない。ハチャーは人間に稲を持ってこることができたが、途中の溜池で水を飲もうとした。飲んだときに池に糞が落ちてしまった。「こういうことがあった」と人間に報告し、池に落としたので持ってこれなかったことを報告した。

そこで、人間はあひるにその糞を取ってこいと命じた。アヒルがその池まで行ってその稲を取って人間に渡した。そのときから人間はその種をもとにして稲作を始め、稲を増やしてきた。このとき盗んできた稲は、糯か粳かわからない。アヒルは鶏の代わりに供え物にすることができる。

こうした種類の話は、アプー・アダ・ドゥー（おじいさん・お父さん・古いこと）と呼ぶ。

(5) 神の世界型・野鳥が泥棒した稲種

①ボケオ県ムン郡ボンサワン村（アカアグイ族）

N20° 44' 39.3" E100° 28' 22.4" H620^位

2009年1月9日聞き

「ハジャ」という話

昔は人間の世界には稲がなかった。ある日、山みtainな高い所で神様が稲を天日干しをしているのが人間に見えた。人間はとれないのでハジャという野鳥に持ってきてもらうように頼んだ。ハジャは稲を飲み込んで持ってこようとした。しかし途中で神様が「お前は稲を飲み込んで持っていきこうとしているのではないか」と言って胃袋を検査したが、ハジャは胃袋を反対側の首の後ろに隠したので、神様は見つけることはできなかった。それでハジャは稲を持ってきてくれた。その稲を種子としてアカ族は稲作を始めた。その稲の名前はわからないが、粳米であった。今あるかわからない。

(6) 滝壺型・蛭が盗んでくる稲種

①ルアンパバン県ゴイ郡ドーン村（カム族）

N20° 40' 45.3" E102° 49' 43.1" H1177^位

滝壺から蛭が盗んでくる稲種

昔、まだ稲がないとき、ある人が夢を見た。その夢は、ある人がやってきて「もしお前が稲の種を欲しければ、あそこの滝の下にあるので取りに行きなさい」という夢であった。実際に滝までやってくると、大きな滝壺があり、その中に稲を見つけた。しかし、そこに取りに入ろうとすると、風が強くて死んでしまうので、人間は取りに行けなかった。

そこで、プルアン（蛭）に「お前は、風が吹いても水に流されることはないから、稲を取ってきてくれないか」とお願いした。プルアンは「わかった」と言って、滝壺に入って稲を取ってきてくれた。そして、プルアンはその人間に向かって「僕はお前に稲を取ってきてやった、お前は僕に何をくれるのか」と尋ねた。人間は「分かった。僕の血を食べさせる」答えた。蛭は納得してその場を引き上げた。その後、蛭は人間の血を吸うようになったということである。

その時取ってきた稲は、ゴツ・プラヨン（稲・強い力を持つ蛇）という名前である。その後、ゴツ・プラヨンはゴツ・ウエック（ウエックは除草用の小鋏）と呼ばれるようになったが、何故そうなったかは分からない。

②ポンサリー県マイ郡オムカネン村（カムクエン族）

N 21° 11' 58.8", E 102° 42' 56.9", H 507m

2008年12月24日聞き書

崖穴から蛭が盗んでくる稲種

昔、人間がいた。ある崖のところに穴があっていつも強い風が吹いていた。その中に稲があるが流れてとれない。それで人間はプルアンム（大きなヒル）に頼み、お前がその中にいる稲をとってくればそのお返しに人間の血をのませてあげると約束した。ヒルが頑張って穴にはいろうとした。風が強い時ははいつくばり、風が弱いときを見計らってぴゅとのびて、それを続けて朶がはえている所まで入れた。それから体に朶におしつけて体中につけて、出る時は強い風にのって飛び出てきた。そして人間に朶を渡した。人間たちは、それを少しずつ分け合ってそれを種に稲を作り始め、今まで作り続けてきた。だから、現在でもヒルは約束通り人の血を吸うのである。

6 穂落とし型稲種復活神話

(1) 野鳥がもたらす稲種

①ルアンナムター県プーカー郡ナムシン村（カムクエン族）

N20° 45' 59.1", E101° 12' 32.0", H707m

2009年1月3日聞き書

昔は、稲はノグピーという鳥が持ってきてくれた。それを種にして稲作りをはじめた。だからいくら収穫してもまだ残りがある。それはノグピーが食べるためである。これはタイル一族の話である。

(2) 魚が復活させる稲種

①ルアンパバーン県ナムバック郡コックナン村（タイルー族）

N20° 17' 33.2" E102° 15' 08.8"

魚から復活する稲種

種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、ホーン（播種儀礼を行っ

た聖なる畑)を閉めてある竹の一方向を開いて、家から持ってきたガイ・メイ・ウン・カオ(鶏・雌・抱く・稲)と呼ぶ、家族で育てた内のよく卵を産み、よく雛を育てる鶏(毎年同じ鶏)と、パーシュウ、パークンという雌雄二匹の魚を、ホーンの中に生きたまま供える。この鶏と魚を供える由来として次のような伝承がある。

昔、タイラーは米作りはしていなかった。パーマイ・ヒーマパーン(森・豊かな野性)という山の中に、直径が7拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、ラオカオ(米倉)をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、粃が飛んできて独りでにいっぱいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたメーマイ(寡婦)が、ラオカオを作り直していた。ところが、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは粃を迎える準備が終わっていたのでいっぱいになった。しかし、メーマイのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた粃はラオカオの梯子の登り口に溜まっていた。メーマイは、悔しさの余り怒って棒でその粃を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の粃が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた粃はカイパー(野鶏)の雌が保管した。また、川に逃げた粃はパシュウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ(～さん・お手伝い・ソツ)と命名して保管した。それ以後10万年間、タイラーは粃がなくなってしまった。

ところが、10万年後、あるお金持ちの女性が、ヒーン(三角網)を持って川に魚取りに行ったところ、パークンという種類の雄の魚を捕まえた。彼はパシュウという種類の魚のナンタロタラーンの恋人であったので、パシュウは「恋人を捕られたら困るのでパークンを助けてください。その代わりに、稲を差し上げますのでパークンを返してください」とお願いをした。女性がパークンを返すと稲の種をくれた。その時からタイラーは再び稲を手に入れ、稲作りを始めることができた。この時の稲はカオ・シュウ(稲・パシュウ)という名前の稲である。だから、ホンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウン・カオとパークン、パシュウの2匹の魚を供えるのだと言う。

②ファパン県ソップバオ郡ナーヌーン村(タイデン族)

N20° 42' 27.3" E104° 18' 45.2" H341

播種儀礼の魚の模型の由来

サンヘック(種播き始めの儀礼)の時、サンヘック(儀礼的な種播きをする聖なる畑)をティエンハイ(畑の作小屋)の上側に作る。その中に立てるラックサンヘックと呼ぶ竹の柱の上・中・下3段にタレオを付け、柱の頂点に竹で作ったパー(魚)とノック(野鳥)の模型を付ける。このうちパーについては

Hai Leu Long Nam Yangmii Paa
畑 土が崩れる 下に入り込む 川 ～が居るから 魚

と語る。これは、大雨が降って畑の斜面が崩壊すると、稲の魂は川に逃げて魚の下に入り込むが、その稲の魂は、また、魚が川から持ってきてくれるということである。

(3) 野鳥が復活させる稲種

①ファパン県ソップバオ郡ナースーン村 (タイデン族)

N20° 42' 27.3" E104° 18' 45.2" H341^海

また、ノックについては、

Mai Thap Hai Pai Paa Yangmii Nok
木 倒れる 畑 行く 森 ~が居るから 野鳥

と語る。これは、畑の脇の大木が畑の中に倒れ込んできたら、稲の魂は野鳥の居る森に逃げ
てしまうが、その稲の魂は、また、野鳥が森から持ってきてくれるということである。

実際に畑が崩れたら、モシュー（呪術師）を頼んで、遠い先祖のが住む所まで行って、稲
の魂と一緒に呼んできてもらって、サンヘックの所に植えてある稲の母と呼ぶキンチュー
（レモングラス）を持って、川までその稲の魂を呼びに行く。終わったら、キンチューはサ
ンヘックの所に掛けておく。大木が倒れたときも同じ方法で森まで稲の魂を呼びに行く。

②シェンクアン県カム郡ポーシー村 (ムイ族)

N19° 37' 44.1" E103° 42' 59.0" H520^海

あるとき、獵師が森に入って獵をしていたら、ある木の幹に穴が空いているのを見つけた。
そこには、食べられた稲の籾殻がたくさんあった。

誰がそこに持ってきたのか分からなかったので、隠れた見張っていた。すると、そこに
ノッピーという野鳥が飛んできて穴の中に入っていった。そこで、獵師は入り口を塞いで、
「お前は、こういう米をどこから持ってきたのか。白状しないと殺すぞ」とノッピーを問
い込んだ。ノッピーは死にたくなかったので、「誰それの畑から持ってきた」と白状した。
そこで獵師は「俺たちの村の稲の魂がいなくなるので、その稲を返しなさい」と言った。
ノッピーは持ってくることを約束したが、「約束を守りたいので、持っていったときにどん
な鳥が持ってきたか分からないから、私が持っていったのが分かるように、私の形にヘップ
（穂摘み具）を作って、比較してみてください」と言ったので、それを作って稲を収穫した。
それで、稲がたくさん収穫できたので、ノッピーが約束を守って獵師が助けてやったお礼に
来たことが分かった。

また、穂を積んで稲小積み「ウン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）」のときには、次の
言葉を述べる。

また、最終的に米倉に籾を入れるときにヘッタンカオも一緒に入れる。

nok chok dai khap mii
野鳥 名前 ~しました 口にくわえて 逃げる

nok tii dai khap phai
 名前 逃げる

on dai khap khao huu
タケネズミ 入れる 穴

n u u d a i k h a p k h a o b o k
鼠 うろ

k o u h a i m a a v a n h m i i
それぞれの ~してください 来る 今日

(4) 塩商人が復活させる稲種と播種儀礼

① シェンクアン県カム郡タットノイ村 (ムイ族)

N19° 35' 36.1" E103° 35' 20.3"

塩商人が取り戻した稲魂

昔、舟で塩の商売をする人がいた。最初に出掛けた人と二番目に出かけた人は、川の岸辺でカオラム（竹筒飯）を焚いたが、注意を怠ったために焦げさしてしまった。それでカオラムを食べずにそのまま捨て置いて、そのまま舟で川を下って行ってしまった。

その後、三番目の人が舟で川を下っていたところ、何かが泣いて居るのが聞こえてきた。何が泣いているのか知りたくなって、泣き声のするところに行ってみると、泣いているのは稲の魂であった。稲の魂は「どうして私を捨てたのか。焦げて大変だ」と泣いているのであった。

そこで、三番目の人は泣いている稲の魂を連れて帰ってきて、種播きの時も収穫のときも稲の魂を呼んで儀礼をした。すると、だんだん収穫があるようになってきた。だから、外の人々も稲の魂を呼んで儀礼をするようになった。

7 流れ下ってくる稲種

① Houa Pang 県 Thong 郡 Tamlar Neua 村 (Tai Phuang 族)

N19° 55' 36.0" E103° 26' 42.9" H1257m

2008年2月29日聞き

流れ下ってくる巨大米と稲作の起源

昔の話ですが、稲の粒は直径が9握り拳の大きさであった。日に干すことも精米する必要もない稲であった。だから、刀で切って蒸したり、炊いたりして食べていた。

あるとき、夫を亡くした一人のメーマイ（寡婦）のカラキニーさんが、自分の米倉を造り終わらないうちに、直径が9握り拳の大きさの粃が川の上流から流れてきた。カラキニーさんは、小さく叩き割ろうとして叩いたところ、小さくなっているところへ飛んで逃げ去った。それで、10万年の間だ人間は米がなくなり、食べることができなくなった。

それから10万年後、サミーさんという女性が魚獲りに川に行った。クワンカオ（小さな粒になって飛んで逃げたの稲の魂）は、パーコーという雄の魚の口の中にあつた。サミーさんは、パーナイという雌の魚を捕まえた。すると、パーコーが出てきてサミーさんに向かって「パーナイは自分の恋人であるから返して欲しい。返してくれたら代わりにクワンカオを上げましょう」と言ったので、サミーさんは、パーナイとクワンカオを交換して、それを持ち

帰って種として、森を拓いて畑にして稲作を始めた。このときから稲作が始まった。その種の名称は分からない。

② Houa Pang 県 Thong 郡 naa kut 村 (Tai Phuang 族)

N19° 57' 53.2" E103° 27' 56.7" H1369^位

2008年3月1日聞き

流れ下ってくる巨大米と稲作の起源

昔は、稲作りをしなくとも、米倉の掃除をきれいにしておくと、米は森からひとりりで流れてきて、米倉がいっぱいになるものであった。

あるとき、一人のメーマイ（寡婦）が米倉の掃除を済ませないうちに、上流からマクトーン（冬瓜）の大きさの米が流れてきた。メーマイは怒ってその米を叩いた。米は小さく砕けて四方八方に逃げてしまった。

そこで、人間が食べる米がないので、蛙の王様が米の魂を守る女性の神様であるナンコーソックに、「人間に稲をください」と頼んだができないと断られた。さらに、蛙の王様が「穂の長さは私の一尋の長さでいいですから人間に稲をください」と頼んだところ、ナンコーソックは稲をくれた。人間は、それをもとにして稲作を始めた。だから、稲の穂は今でも蛙の一尋の長さなのである。

8 竹の桿から出現・復活する稲種

(1) 竹の桿に隠れ復活する稲種と収穫儀礼の起源

①ルアンパバン県ゴイ郡ドーン村（カム族）

N20° 40' 45.3" E102° 49' 43.1" H1177^位

竹の桿から見つかる籾

昔、1人のマボイ（寡婦）がいた。ある日、森に竹の薪を取りに行った。マボイは、取った薪を家まで運んできて、それを割ったところ3粒の籾を見つけた。

マボイは、貝殻虫の巣を火で焙って軟らかくして、その3粒の籾を包んでプラネッゴツ（稲の頭、守りもの）にして、収穫の時に畑の作小屋に持って行き、籾を扱き落とした。プラネッゴツがあったので、たくさん収穫があった。この話があるので、その後は村人たちもプラネッゴツを作小屋に持って行って、収穫作業をするようになった。

②ウドムサイ県フン郡プーラット村：旧ナムコンム村（カム族）

N20° 17' 06.4" E101° 20' 36.6" H626^位

逃げ隠れる籾とその復活

昔、この村のある人が、タラーヤスックの竹の節の中から籾を見つけた。見つけた人は、逃げて隠れた籾だと思って、その籾を畑に植えて種にした。

どうして逃げたのか。それは、収穫儀礼をきちんと守らないからである。例えば、稲刈り始めの時に3日間は他の家族の人が畑に入らないように、畑の出入口にタレオを立てたり、家の中にも入らないようにするが、それを守らなかったりすると籾は怒って逃げるのだとい

う。

(2) 竹の桿に隠れ復活する稲種

①ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

N20° 49' 35.9" E102° 41' 15.3" H368^米

逃げ隠れる粳とその復活

昔、マボイ（寡婦）がいた。彼女には男の子が1人いた。しかし、夫が亡くなってからだんだん貧乏になっていしまい、他人の米をもらっても足りずに、盗んで食べたりした。盗んできた米に「どうして私のところには来ないんだ」と文句を言っただけのしつた。

マボイは、息子が少年から青年になるころに出家させた。息子は修行を積んでだんだん位が上がっていき、偉くなっていった。成人になって結婚したくなって還俗を願い出た。しかし、師匠の偉い坊さんは「お前は還俗して結婚すると貧しくなるよ。還俗しない方がよいよ」と忠告してくれた。しかし、どうしても結婚したくて、その忠告を聞かずに還俗した。

還俗して結婚して普通の生活をし、畑を作った。しかし、この人の考え方は普通の人とは異なっていた。それは、畑の広さを狭く開いて、品種をたくさん植えてたくさん収穫しようという考え方であった。植えた稲の種は、ゴッ・プラヨン、ゴッ・ダム・ダンコロック、ゴッ・タムキヤン、ゴッ・タンメー、ゴッ・ゴーの5種類で、各種粳を2.5kg入るボツ（竹筒）一杯ずつ播いた。しかし、それほど収穫はなかった。2年目も3年目もそれほど収穫がなかったので、稲に向かって「どうしてお前たちは俺のところ集まってこないんだ。米は人間のためにあるのだろう。お前たちは僕らを死なせたいのか」と文句を言った。稲は怒って5種類とも逃げてしまって、チョッやタネックの節に隠れてしまった。今、竹の節から見つかる粳粒は、その時隠れた稲であるという。

(3) 現実の体験譚として語られる竹の桿から復活する稲種

①ルアンパバン県ゴイ郡ハッサブーイ村（カム族）

N20° 42' 27.3" E104° 18' 45.2" H341^米

竹の節から見つかる粳

昔、タラー（ラオ語名マイヒヤ）という竹の節の中に、ゴッ・ランダムという中間種の糯種の粳を見つけた。それを種粳に混ぜることはなかった。このゴッランダムは、この村に昔からずっとある品種である。

②ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

N20° 49' 35.9" E102° 41' 15.3" H368^米

逃げ隠れる粳とその復活

ウオンさん（62歳）の奥さんトンさん（57歳）は、4年前にチョイ（マイソフ）の節の中から28粒の粳を見つけた。

ある日、トンさんは、蝙蝠が住んでいる穴のあるチョイを探しに森に入った。末が折れて

無くなってしまったチョイの4節目に、蝙蝠の住んでいる穴があった。そこで、トンさんは蝙蝠が住んでいるのではないかと思って切ってみた。しかし、蝙蝠は住んでいなかったが、「きれいになっているチョイだなあ、畑で服を干す竹にしよう」と思って、8節目を切った。その時、その節の中から28粒の朮が出てきた。その朮を家に持って帰ってきて、半分はプラネゴッ（稲の宝）にして、半分は種朮にした。その稲の名前は、ゴッ・ダム・ダンコロク（稲・白・茄子）という稲で、もともと村にあった稲であった。この種は、お父さんが亡くなったときに、あの世に持たせてやったので今はなくなってしまった。

③ポンサリー県マイ郡オムカネン村（カムクエン族）

N21° 11' 58.8", E102° 42' 56.9", H507^位

2008年12月24日聞き書

現実に竹から稲種をみつけた話

シーボンさんが35才のとき、焼畑を伐りに行ったときのこと。ほとんど伐ったので、あとに残っている所を伐ろうとした。近くのポット（ラオ語名マイラン）という竹を伐ろうとしたら、右足でその竹を踏んでしまった。そうしたら稲粒がふくらはぎに1粒ささったので、竹の中を見たらあと2粒見つけた。その3粒を持ってきて家の小屋の近くに植えた。2粒は鶏に食べられ、それで母親が鶏に食べられないように1粒を育て、収穫した稲を種朮にして、それ以後ずっと作ってきた。ゴッ・ポット（稲・ポット）と名付けた。この稲は今もある。

④ウドムサイ県フン郡プーラット村：旧ナムコム村（カム族）

N20° 17' 06.4" E101° 20' 36.6" H626^位

竹の節から見つかる稲

昔、前の村（サコーイ村）にいたときに、友人が30歳のころ（30年ぐらい前）、プーランを伐っていたとき、節の中に稲を見つけた。その稲は、ゴッ・パヌルン（稲・羽根）という名前です。飛ぶことのできる稲という意味である。きちんと儀礼をしなかったので飛んで逃げたのであるという。

⑤ルアンナムター県ナーレー郡トントーン村（カム族）

N20° 35' 37.1" E101° 27' 14.3" H447^位

竹から見つかった稲

村長が、20年くらい前（24歳の時）に、焼き畑作業で焼け残りの木を集めて焼いていた時、ノーコンという竹の中に20種類以上の稲を見つけた。しかし、我々の村では長老や母親に「竹の中に稲を見つけると運がよくなくなる。運のよくない人に見つかるもので、見つけた人は病気になったりするのだから、見つけた稲は捨てるものである」と聞かされていたので、その稲は捨ててしまった。

稲が隠れる理由

稲を抜く時、抜き忘れた稲が怒って隠れたものであるという。

⑥ルアンナムター県ナーレー郡トントーン村（カム族）

N20° 35' 37.1" E101° 27' 14.3" H447^位

枯竹から見つかる稲

枯竹の茎の中から稲を見つけると運がよくなるという。その稲を種にして播くとよく実り、収穫があるという。

稲が枯竹の中に隠れたのは、その家の人が稲を扱く時、扱き忘れた稲が怒って隠れたのであるという。

⑦ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村（カム族）

N20° 49' 22.2" E101° 28' 06.3" H520^標

枯竹から見つかる稲

50から60年くらい前に、ヤールンさんという老婆が、プートン村で枯竹を伐ったときシャーツという音を聞いて、シロアリの糞が出てきたと思って見たところ、稲粃であった。

ヤールンさんは、逃げて隠れた稲だと思って持ち帰り、畑に種粃として播いた。ところが、3年後にヤールンさんは死んでしまった。家族は、稲を持ってきたから死んだのだと思った。どこで見つけたも見てもよくない。

⑧ルアンナムター県ナーレー郡サリアーンバン村（ラメット族）

N20° 22' 13.6" E101° 12' 51.2" H443^標

竹の節から見つかる粃

昔、ある人が家の床板や壁を作るために、タネックという竹を割っていたときに、3粒の稲を見つけた。その粃を種にして畑に播いた。その稲は、ゴツ・カルーという品種であった。この人は、他の品種の稲が全部実ったのに、この稲だけが実りが遅かったので、この稲をゴツ・カーン（稲・怠け者）と名付けた。

⑨Luang Prabang 県 Kham 郡 Ombring 村（Mhong 族）

N20° 24' 24.6" E102° 59' 24.3" H940^標

2008年3月4日聞き書

竹の子の稈から復活する稲種

村長のサイフートー（ラオ名ブンミー）さんは、1981年に森の中で焼畑地を伐採していたときに、背丈50^{センチ}くらいの竹の子の節の間だから13粒の稲の種を見つけた。

それを種にして播いてみたところ、普通の種類の赤い糯の稲であった。その米は、3年間は鼠や野鳥に食べられなかった。その後、村長が村人に分け与えて10年間作ったが、収量があまりなかったので作るのを止めた。

この稲は、霊が食べるために隠していたものであるという。

⑩ルアンナムター県プーカー郡ナンパーマン村（ムスー族）

N20° 41' 04.9" E101° 00' 35.0" H673^標

2008年12月30日聞き書

竹の稈から見つかる稲種

昔はマイホックの薪をとりに行くものであった。マイホックの節からは別の種をみつけてそれを持ち帰って種子にした。稈の米であった。オディーという名前である。この稲は、今

もある。

9 稲の長老としての黒・赤米

(1) 稲種の始源と黒・赤米

①ウドムサイ県フン郡プウラット村：旧ナムコンム村（カム族）

N20° 17' 06.4" E101° 20' 36.6" H626^米

オムクッコンの話

昔、カム族のある男が、オム（タケネズミ）を捕りに出掛けた。オムの穴を見つけて掘ったが、1日掘ってもとても深く届かなかった。3日目か4日目に漸く掘り当て、オムを捕らえることができた。ところが、捕らえたオムがその男に向かって、「どうしてあなたは私を捕らえようとしているのか。私は、地球の奥まで穴を掘って熱水を出すのに、どうして私を捕らえるのか。私が出す熱水は洪水となって地球を浸してしまう。もし、お前が死にたくなければ大きな丸太を削り抜いて、その両口をフウツ（蜜蠟）で閉じなさい。そうすればお前は助かる」と話した。男はそれを聞いてオムを放してやって、村に帰りオムの言ったとおりに準備をした。

オムは男に言ったとおりに熱水の洪水を起こし、だんだん熱水が迫ってきた。削り抜いた丸太の中には二人しか入れる隙間がなかったので、男は誰を入れるか迷った。先ず、自分の母親を入れようと思ったが、母親は歳を取っていてやがて死ぬので入れても仕方がないと思って止めた。次に、自分の妻を入れようと思ったが、妻は別の家族の出身で、自分の身内でない（血のつながりが無い）ので止めた。結局、自分の妹を入れた。外は熱水の洪水になって、他の人はもちろん母も妻も全部死んでしまった。

兄と妹の入った丸太は洪水の中を浮かんで、どこへ流れていっているのかも分からない。洪水が収まったかなと思って外を見たくなるとは、ヤマアラシの針で蓋の蜜蠟を突き、水が入ってきたらまだ収まっていないと思い、穴を塞いだ。それを繰り返して、最後に水が入らなくなったので、蜜蠟を破って外に出た。外に出てみると誰もいなかった。

そこで、二人で家を立て始めた。暫くすると、二人とも結婚しようと思うようになった。兄は妹に「私も結婚するのでお前も結婚しなさい。相手を探しに行きなさい」と言って、相手を捜しに出た。しかし、二人とも相手を見つけることができなかった。妹が向こうに立っている男が居ると思って走っていっても自分の兄であった。また、兄が向こうに立っている女が居ると思って走っていっても自分の妹であった。結局、二人とも疲れてしまって、相手を見つけることはできなかった。

その時、^ノツタコックという鳥が「トックコック トックカイカイ（何れも鳴き声）
プレイ・ナー・モック（兄貴・と一緒・妹） スルコック（抱き合う：結婚する）
ヨッテー（しなさい）」と鳴いた。それを聞いて二人は鳥が言うように結婚した。やがて妹は妊娠した。しかし、1年しても2年しても子供は生まれなかった。漸く3年目になって生まれた。しかし、生まれてきたのは人間ではなかった。何の実かは分からないが、クルンム

ンという実に似た南瓜か瓢箪ぐらいの大きさの実であった。仕方がないのでそのまま家に置いていた。

ある日、兄は1人狩りに出掛けて行った。モクチョンベツという山は、雄雌、100種類もの多くの野生の鳥や、野生の鶏、野生の動物がいっぱいいるところであった。その山は高かったので洪水に遭わなかったのだろう。兄はそこでタワーという網を使って、クットーンという鳥を捕った。それを家に持って帰って料理をするため解体したところ、胃袋のなかにいっぱい粉が入っていた。その粉は、ゴツ・ワーン、ゴツ・モン、ゴツ・ジインム、ゴツ・エツ（別称ゴツ・ヒヤン）、ゴツ・ルアンの5種類であった。

兄は、その粉を種粉として、家の近くの森の白蟻の塚の周りを伐り開いて、焼いて畑にして播いた。それが実って収穫を始めた。そんなに広くもなく、いくつかの株しかないのに、収穫しても収穫しても終わらない。家に帰って再び蟻塚に行くと、まだ穂の粉が減っていない。収穫を続けているうちに疲れてしまった。その時、シン・チャラン・コイという鳥が、「ファン・ププツ（鳴き声） フウツ・リッド（蜜蝋・閉めなさい）」と鳴いた。兄は蟻塚の頂点に蜜蝋を付けた。そうしたところ、穂が無くなってしまった。

妻の妹が家の周りで仕事をしていると、誰かの話し声が聞こえてきた。家の中を確認しても誰もいなかった。その後、そんなことが何回も続いた。ある日、妻は怪しい、クルンムンではないかと思って、スルネー（竹細工用の金串）を火で焼いて突き刺した。そうしたところ、中からたくさん人間が出てきた。最初に出てきた人たちは黒く焦げていて、次第に白くなっていった。出てきた人たちは、順番に倒木に並んで腰掛けた。ところが、その倒木が重みのために折れて、人々はひっくり返ってびっくりして、声を上げて話を始めた。その声は別々の言葉であった。それが今の別々の民族の言葉になった。最初に出てきたのがラメツ族の人で最も黒く、二番目に出てきたのがカム族で次に黒かった。跡はだんだん白くなり、ラオ族とかいろいろな民族になった。最後に出てきたのがモン族で、だから彼らは最も白いのだ。

②ウドムサイ県ムンサイ郡パクメン村（カム族）

N20° 33' 45.5" E101° 58' 22.2" H898m

ゴツインムの由来

昔、この村に主人も死んでしまった独りぼっちなマボイス（寡婦）が住んでいた。彼女は、一人で焼畑を行ってきた。マボイスは貧乏ではあったが真面目に働き、母から教えてもらった儀礼もそのとおりに行ってきた。ある日、畑の作業を行っていると、タブンルという野鳥が、畑の脇にあるマイホックという竹の枝に巣を作って住んでいた。

いよいよ収穫の日になった。彼女は、鳥の巣が気になって見に行ったところ、タブンルは飛び去って行ってしまった。鳥の巣を見てみると、巣の中には30粒の粉が残されていた。彼女は、卵があるはずなのにおかしいなと思いながらも、その30粒の粉をもらってきて、大事に保管しておいて翌年の種粉にした。それを畑に植えたところ、収穫の時にベンホツ（稲扱き用の小さな腹籠）一つの量に増えた。その翌年、ベンホツ1つの粉を種粉にして畑に播

いたら、ヤン（大きな背負い籠）で40個分の収穫があった。

ある日、彼女は夢を見た。見た夢は、タプンルが飛んできて「あなたは、毎年同じように儀礼をしてくださいね。私は、あなたに種粉を持ってきてあげたのですから」と言った。彼女は、その後タプンルに言われたとおりに儀礼をし続けたので、毎年毎年稲粉がよく穫れた。

タプンルの巣から見つかった粉は、今もある粉殻が赤っぽいゴインムという晩稲の糯の種子である。

10 稲の魂を喜ばせる鶏頭の花

(1) Khmu 族の伝承

① Houa Pang 県 Xam Tai 郡 Pung Siang 村

N19° 46' 41.95" E104° 32' 03.9" H642^位

2008年2月20日聞き書

ラングロン（鶏頭の花）の花がきれいに咲くと、稲の魂が喜んで集まってくるので、稲の収穫が増えるという。だから、マツハレツという播種儀礼のときに、稲の種とともにマツトハレツ（聖なる畑）の中に播く。

② Luang Prabang 県 Kham 郡 Samtom 村

N20° 26' 27.8" E102° 56' 51.9" H830^位

2008年3月5日聞き書

カム暦6月上旬に中稲と晩稲を播くときに、バーツ ハレツ（注ぐ・焼畑）あるいはバツホ・サムラー（供える・稲の種子）という種蒔き始めの儀礼を行う。儀礼を行う場所は、トゥツ（作小屋）の上側で行う。

まず、霊が畑にやってきて稲に悪さをしないように稲を守ってくれるチャラッコイ（鬱金）を植える。

さらに、その周りにラングロン・シンチル・イヤル（花・鶏冠・鶏）と呼ぶ鶏頭の花をはじめとして、ランバンジャン、ランサンピー、チンキヤルカマン、ランルンという花の種を播く。これらの花は、稲の魂へのお供え物で、その種は毎年の種蒔き始めの儀礼で植えたものを引き継いできているものである。マツカルー（新しい年を迎える日の儀礼）には、この花と稲の種とを畑から持ってきて、長い棒の先に取り付けて家の中央に立てて、その周りに芋類や南瓜など畑で取れたものを置いて、先祖にお供えをする。

③ ルアンパバン県ゴイ郡ハッサプーイ村

N20° 47' 05.3" E102° 39' 28.9"

そろそろ粉を穫る時になると、作小屋をきれいにして畑の米倉を造る。このとき、内側や外側の壁、入り口に、白、黄、赤色のラングロン（鶏頭の花）を飾る。花がきれいなので、米がたくさん集まる。

④ ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村

リッド・レック・チュモン・ゴツ（儀礼・始める・穴を開ける・稲）という播種祭で、儀

札的な種播きのとき稲の種、鬱金と一緒に植える。稲の収穫が多くありますように、畑の飾りとなるように播く。

⑤ウドムサイ県ガ郡ホワイレンム村

ラングロン（鶏頭の花）は、鬱金の周りにも播き、畑の中にも播く。収穫の時米倉の入り口周辺に飾る。この花は、ラン・マン・ゴツ（花・魂・米）であるとか、ラン・マー・ゴツ（花・母・米）であるとのとか言われ、稲の魂や稲の母を喜ばせる花である。

⑥ウドムサイ県ガ郡ケオ村

ラングロン（鶏頭の花）は、ルンクワ（聖なる畑）や小屋の周りに播く。この花は、マー・ル・ゴツ・マー（魂・米・母）がとても好きな花であるので、これを播くことで稲の魂が畑に集まってくれるようにとお願いする。

⑦ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村

ラングロン（鶏頭の花）は、畑の飾りに植える。金色と赤い色の花で、この花を植えると稲もたくさん収穫できるようになり、植えないと稲がきれいに実らない。

稲母の花というのは Cholwan という花で、収穫のとき稲を抜く前にこの花を揉んで穂に付けると、稲の魂がたくさん飛んで来るという。

(2) カムクエン族の伝承

①ルアンナムター県ナムター郡チャルンスツ村

ラングロン（鶏頭の花）は、ルンクワ（聖なる畑）や小屋の周りに播く。その種類はチャラワン、チャラゲ、チャブニャルー、ラングロン、パンチャンの5種類あり、収穫まで採ってはいけない。これを播かないと稲がよくできない。稲の収穫のときには、籾を扱って入れる大きなベン（背負い籠）と小さなベン（稲扱き用腹籠）には、チャラワン、チャラゲ、チャブニャルーの花を必ず飾らなければならない。

(3) ムスー族の伝承

①ルアンナムター県シン郡ホエルー村

スエニー（鶏頭の花）は、カウド（播種祭）のときに稲とは関係なく、畑の中の道の近く、畑の小屋の周りに播く。稲を見に来た稲の霊たちが、スエニーがないときれいじゃないと思うから播く。収穫のとき、畑の稲倉の壁に飾る。

(4) ラオ族の伝承

①ボンサリー県サンパンサイ郡パクバーン村

ドク・ホン・カイ（花・頭・鶏）は、播くことによって、稲の魂が集まって来るという。サンヘック（種播き始め）の時に、サンヘック（供物台）の周囲に播くとき、「サンヤブリ県のケンタオにある糯米の魂も、ヴィエンチャン県のカシというところにある粳米の魂も、ドクホンカイ（鶏頭の花）のところに集まってこい」と唱える。

誰かが糯米を最初に播いたときに、粳米とドクホンカイの三種の種を一緒に播いたからであるという。

②ポンサリー県サンパンサイ郡カナ村

昔は、稲が兄、ドクダイ（鶏頭の花）は弟という兄弟の関係で、お互いにとても香りのいい花だった。特に、ドクダイは、もともとドク・キン・ホーン（花・香り・とさか）という名前であった。神様は、二つが一緒に花が咲いたら、それぞれがとてもいい香りなので、誰もが欲しくなり、人間たちは喧嘩をするようになってしまうと心配した。そこで、稲だけ少し香りを残して、ドク・キン・ホーンの香りは全部持って行ってしまった。そのときからドク・キン・ホーンという名前ではなく、ドク・ダイ（花・ただの、香りが無い）と呼ぶようになった。

だから二つはいつも一緒に植えるものであると言う。また、ドクダイの種をまかなくても畑には出てくるものである。種が混じっているのであろう。、仏様に供える花である。

(5) ラオクー族の伝承

①ポンサリー県ヨッウー郡マイソンファン村

種播き始めのときに、聖なる畑にウエーブーアウエイ（鶏頭の花）の種も稲の種と一緒に播く。昔から先祖たちはこれを植えてきた。稲の霊を呼んでくれる花、美しいので畑に集まった稲の霊が楽しくなる花であるという。

(6) プノイ族の伝承

①ポンサリー県ブンヌアー郡ピエンサイ村

種播き始めのときに、聖なる畑のプーチャラ（供物台）やヒヤチョン（畑の小屋）の周りに、ミネー（鶏頭の花）も播く。収穫儀礼のときに使う。稲とミネーは、稲が男で、ミネーが女という関係のもので、稲があるからミネーがあり、ミネーがあるから稲がなければならぬ。ミネーが稲より多く実ったらあまりよくない。女性が男より強いとよくない。稲が多いほどよい。

11 稲と聖なる畑に引き継がれる鬱金の株

(1) Khmu 族

①ルアンパバン県ゴイ郡ハッサプーイ村

N20° 47' 05.3" E102° 39' 28.9"

アレック・ハレット（始める・畑・種播き儀礼）の時、小屋の近くに聖なる畑を設け儀礼的な播種を行う。このとき、家から持ってきた鬱金を植える。これは、先祖の霊と同じもので、畑を守ってくれるから植えるのである。

②ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村

チェキヤル（鬱金）は、リッド・レック・チュモン・ゴッ（儀礼・始める・穴を開ける・

稲)という播種祭で、儀礼的な種播きのとき稲の種、ラングロン(鶏頭の花)と一緒に植える。収穫作業が終わる前に掘ったり、葉をむしったりしたらレントーン(脱腸)になるか、口がひん曲ってしまう。

この鬱金の根は、収穫作業が終わって10日後ごろに雷のなる前に、掘り起こして家に持ち帰り保管しておいて、翌年のリッド・レック・チュモン・ゴツのときに継続して植える。雷のなる前に掘り取らないと来年の稲が穫れない。

③ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村

種播き始めのとき、畑全体が播き終わったら、最後に鬱金をチャオ(作小屋)の上側と下側に植える。この鬱金は、チェキヤール・ゴツ(鬱金・稲)と言い、その前年も、またその前年もずっとチャオの上側とした側に植え継いできたものである。これは、稲に対して薬になって稲が元気になり、稲が気楽に成長するという。

(2) ラオ族

①ポンサリー県サンパンサイ郡パクバーン村

サンヘック(種播き始め)の時に、ワン(鬱金)はフア・ハイ(畑の上側の縁)に一列に植える。これは、ワン・カン・ピー(鬱金・守る・霊)と呼び、悪霊を追い払うと言われ、特に雷避けになると言われる。

III 播種儀礼における神話の反映

1 魚の竹製模型と稲と鶏頭の花の種の儀礼的播種

(1) ルアンパバーン県ナムバック郡コックナン村タイラー族

儀礼名 ホン・カオ・ヘック(家・米・始める)

まず、種を播く日の午前中に畑に行き、作小屋の近くにホンカオヘックという祭壇を作る。1畝四方に区画し、四隅に竹を立てそれぞれ頂点にタレオ(六ツ目編みの竹編み)を付ける。その足下に竹の筒を立て、それぞれに水を入れる。その区画の中央に竹を1本立てて、その頂点にゴザ目編みの竹編みのホン(小さな家)を取り付け、竹の中程に大きなタレオを取り付け、足下に竹筒を立て水を入れる。四隅のタレオの間に割り竹を弓なりに差し、外から入れないようにする。ただし、中で儀礼的な種蒔きが終わるまでは、一方向は解放しておく。

次に、ホンから竹で編んだ小さな魚の模型の輪を1列下げて、一番下に竹編みの大きな魚の模型を下げる。

さらに、ホンの中に花、赤砂糖黍、バナナを供える。

次に、ホンを支える中央の竹の足下に、種籾とドクダイ(米の魂に恩を返すお礼の花で、鶏頭の花であると思われる)種蒔きをする。簡単にする人は3, 5, 7株しか播かないが、真面目な人は30株も播く。この時に種を播く人は、せっちな人ではダメで、落ち着いて播かなければならない。また、今年、主人が播いて稔りが良くなかったら、次の年は奥さんが播

いたり、子供が播いたりする。この種蒔きが終わると、開いていた入り口を閉じる。こうすると中に悪いものは入れない。それを播いた人は、その日は火を扱うことはできない。また、畑全体の芽が出るまでは髪を切ってはならない。そうしないと稲の穂がよく出てこないからである。この種蒔きが終わったら畑全体の種蒔きを行う。

(2) ポンサリー県サンパンサイ郡パクバーン村（ラオ族）

儀礼名 サン・ヘック（祭りの台・始める）

4～5月、焼いた後になるべく畑の下側、川があれば川の近くにティエン・ハイ（小屋・畑）を作って準備をしておく。畑のファ・ハイ（頭・畑：上側の縁）には、ワン・カン・ピー（鬱金・守る・悪い霊）といって、悪い霊が畑に来ないように鬱金を植える。鬱金は悪い霊を追い払う力があるので、稲を守ってくれる。

まず、播種儀礼はティエンハイの少し上に、サンヘックを作ることから始める。サンヘックは、4本の竹の柱を立てて、その上に竹を割って編んだ平らな竹マットを乗せた供物台である。

次に、サンヘックの所で、豚1頭か鶏1羽を殺す。豚は、生血を採ってサンヘックに供え、肉、内臓は煮て供える。鶏の場合も、生血を採ってサンヘックに供えるが、肉は1羽のまま湯がいて供える。

それが終ると、「これから種蒔きをします。よくできますように」と願う。

続けて、サンヘックの周りに早稲種、中間種、晩稲の種を混ぜて、3～7株播く。最初に稲を播いた人が、糯種の中に粳の米と一緒に三種類の種を播いたので、今でもそうする。

さらに、ドク・ホン・カイ（花・頭・鶏）も播く。ドクホンカイの花が咲くことで稲の魂が集まってくるので、種を播くときには「サンヤブリ県ケンタオにいる糯米の魂も、ヴィエンチャン県のカシにいる粳米の魂も、ドクホンカイの所に集まって来い」と唱える。

次に、一般の畑の種蒔きを始める。まず、早稲種をファ・ハイに向かって播いて上がる。

続いて中間種をカンクファ（右側の縁）側、ティン・ハイ（下側の縁）側に播く。

次に、晩稲をカンサイ（左の縁）側の上側に播く。このとき播く種の量は、早稲種（20%）、中間種（60%）、晩稲（20%）の割合にする。晩稲が実る最後の時期に雨が降ると、収穫が落ちるので、中間種、早稲種を多くする。

(3) シェンクアン県カム郡ポーシー村（ムイ族）

N19° 37' 44.1" E103° 42' 59.0" H520m

儀礼名 ヘック・サック・カオ・ハイ（儀礼の始め・刺す・稲・畑）

昔、ある子供のたくさんいる家族が稲を収穫するときに、大人たちは稲を大切に扱ったが、子供たちが稲を川に投げたり、森に捨てたり、稲で遊んだり、足で踏みつけたり、ご飯を土の上に落としたりして、粗末に扱ったので、稲が怒って飛んで逃げていってしまった。逃げた稲は、川に隠れたり、森に隠れたりした。また、畑から鳥が持っていってしまったたりして、

だんだんに村から稲がなくなり、食べ物がなくなってしまった。

その後、ある人間が、ノン・サバン（池・名称）に隠されていることを知った。しかし、人間は取りに行けないので、パ・カーン（魚・名称）に取ってきてくれるように頼んだ。パ・カーンは「分かりました。持ってきます」と言って、稲を持ってきてくれた。

だから、種播き始めの儀式であるヘッサックカオハイのときに、竹の魚の模型を作って吊り下げる。また、収穫始めの儀礼である「ウン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）」のときには、次の言葉を述べる。

m i i p a p h o k y u u h u a h a t
居る 魚 名前 ~に 頭 中洲
m i i p a c h a t y u u v a n g
名前 深み
k o a h a i m a x o m k h u a n k h a o
~も ~させる 来る 見て褒める 魂 稲

2 種初・鬱金・鶏頭の花への鶏（生血）の供儀

(1) Houa Pang 県 Thong 郡 Pieng Done 村 (Khmú 族)

N20° 06' 13.7" E103° 23' 18.8" H653⁴

2008年2月25日開書

儀礼名 レック・ハレツ（始める・焼畑）

遅くても焼いてから10日の間には種播きを行う。畑の種播きに先立って、レックハレツという種播き始めの儀礼を、パーン・ハレツ・パヌール（印・焼畑・伐り株）という焼き始めの儀礼を行った伐り株のところで行う。その家の男主人か、その家の長老が行う。

家で、畑に播く全種類の稲の種を少しずつ混ぜたもの、白色以外の色で生きたままの鶏（性は雄雌を問わない）を1羽、ラオハイ2壺、プラネットと呼ばれるお金や石、木の根っこなど家の宝物を皿に入れ、カラントレンウエック（砥石）、チキヤル（鬱金）の根、ラングロンの花の種、ランサンピーの花の種ともに畑のパーンハレツパヌールの前に持っていってお供えする。プラネットがなければ、カラントレンウエックと外の物だけでも良い。チキヤルは、昔から各家で代々ずっと引き継いで、パーンハレツパヌールのときに植えて、収穫後に米倉の内壁に掛けておいたもので、これを植えるとききれいに花が咲いたり根がたくさん増え、あちこちから稲の魂を呼び集めてくれるので、稲もたくさん実るという。また、ラングロンの花、ランサンピーの花は、収穫したときに畑の米倉を飾ったり、新年を祝うときに供える花である。

タレーはそのままで新しくする必要はない。リン（両節を取り除いた竹を半割にした形の容器）を四個1組のものを2組作り、お供え物に向けて置く。鶏の口を割いて「これから種播きをしますので、稲の成長も良く、収穫もたくさんありますように、虫などが稲を食べないように、去年よりたくさん収穫がありますようにお願いします」と唱えながら、鶏の生血

を少しずつ混ぜた畑に播く全ての稲の種に垂らす。また、プラネットやカラントレンウエック、チキヤルの根、ラングロンやランサンピーの花の種にも、鶏の生血を塗りつける。これらの行為は、それぞれに生血（鶏）を食べさせるという意味を持つ。

その後、鶏を料理して、それとご飯を少しずつ混ぜてラオハイとともに、生血と同じように食べさせる。

次に、鶏の生血を垂らした全種類の稲の種を全て、パーンハレツパヌールの伐り株の周りに播く。さらに、チキヤルも伐り株のところに植える。また、ラングロン、ランサンピーの種は、チャルゲツチャルワンという臭いの強い草の種とともに、パーンハレツパヌールの伐り株の周りとトゥップ・ハレツ（小屋・焼畑）の周りに播く。

その後、畑全体に種を播く。特に、早稲種は、リック（ラオ語名はノックピー）という野鳥が食べに来るので、追い払うために見張り易い畑の下側、トゥップハレツの下などに植える。

それが終わったら、ゴツヒヤン（黒米）の種に早稲、中稲、晩稲など畑に播いた全ての種を少しずつ混ぜて、パヌールの伐り株の周りとトゥップハレツの周りに播く。さらに、ゴツヒヤンの種だけを、パヌールの伐り株とトゥップハレツの間に播く。ゴツヒヤンは、稲の先祖、稲の母と言われおり、これを播くことでその外の品種の稲の魂を呼び集めてくれる。

(2) Luang Prabang 県 Kham 郡 Samtom 村 (Khmu 族)

N20° 26' 27.8" E102° 56' 51.9" H830m

2008年3月5日聞き

畑を焼いた後、カム暦5月下旬に早稲の種を播き、カム暦6月上旬に中稲と晩稲を播く。早稲は、中稲と晩稲とは区別して播く。畑が広い場合は、早稲は、畑に野鳥が来ないようにその畑のユアンハレツ（足・焼畑：焼畑の斜面下側の縁）の方に播く。畑が狭い場合は、別に小さな畑を拓いて播く。そのときは、トゥツ（作小屋）も別に作る。分けて播くと、中稲と晩稲の除草が3回なのに対して、早稲は除草が2回で済むので分けて播くのが良い。

カム暦6月上旬に中稲と晩稲を播くときに、バーツ・ハレツ（注ぐ・焼畑）あるいはバツホ・サムラー（供える・稲の種子）という種播き始めの儀礼を行う。この儀礼は、早稲を播くときは儀礼はしなくて播いて良い。儀礼を行う場所は、トゥツ（作小屋）の上側で行う。

まず、朝7時ころに、お供え物として鶏か豚を生きたまま家から畑に連れていく。鶏も豚も性別にはとられないが、白い色のものは禁じられている。畑に着いたらチャラッコイ（鬱金）を植える。このチャラッコイの根は、霊が畑にやってきて稲に悪さをしないように稲を守ってくれる力を持っているもので、毎年、種蒔き始めの儀礼で植えたものを引き継いできているものである。

さらに、その周りにラングロンシンチルイヤルと呼ぶ鶏頭の花をはじめとして、ランバンジャン、ランサンピー、チンキヤルカマン、ランルンという花の種を播く。これらの花は、稲の魂へのお供え物で、その種は毎年、種蒔き始めの儀礼で植えたものを引き継いできているものである。マツカルー（新しい年を迎える日の儀礼）には、この花と稲の種とを畑から

持ってきて、長い棒の先に取り付けて家の中央に立てて、その周りに芋類や南瓜など畑で取れたものを置いて、先祖にお供えをする。

続いて、チャラッコイや花を植えたり播いたりした前方に茶碗を2個置いて、その中にその年畑に播く全ての稲の種を少しずつ入れる。ゲンマと呼ぶ代々家に伝わる宝物の銀貨も入れる。鶏の場合は、首を切ってその生血を茶碗の中の種籾に少し垂らす。豚の場合は、別のところで殺して取った生血を茶碗の中の種籾に少し垂らす。これは、種籾の魂とそこにいる霊に食べさせることを意味し、播いた全ての種が芽を出し、腐らないようにするためである。

それと同時に、家族の中で種蒔きのスピードの一番速い人（ほとんど子ども）が、先ず種蒔きをする。その後、鶏や豚を料理している間に、小屋の上側にゴツ・ハンドロツ（稲・黒い）の種を播いて上がる。ゴツハンドロツは、稲の中で一番上の位の稲であるので、ポンハレツの方に播く。ポンハレツのところまで播いて上がったら、左上、左下、右下、右上という具合に、左回りに中稲、晩稲の順に播く。お昼になったら、鳥や豚の料理とご飯を食べて、昼からまた引き続いて播く。

畑全体が蒔き終わったら、最初に種を播いた子どもが、茶碗の中の生血を注いだ種籾を手にとって、ドクマイ（花）とゴツハンドロツとの間に種まきをする。

種蒔き作業は、一つの畑につき20～30人で作業する。お互いに手伝うが、時間がなくお金のある場合は一日一人10000kipで人を雇うこともある。

3 復活した種の儀礼的播種・鬱金の株の儀礼的植え付けと鬱金魂の継承

(1) ルアンパバン県ゴイ郡ハッサプーイ村（カム族）

儀礼名 レック・ハレツ（始める・畑）

畑を焼いた後、畑の真ん中にチャオハレツという作小屋を建てる。これは、畑作業の時の休憩など生活のための小屋であるとともに、収穫時には畑の高倉となる。

レックハレツの儀礼はチャオハレツの近くの右側に、水を入れていない竹の水筒を傾けて立ることから始まる。

次に、その竹筒の近くに、家から持っていった鬱金を植える。この鬱金は先祖の霊と同じであるから、畑を守ってくれるという。

続いて、水筒と鬱金の周りにゴツヒヤン（黒米）の種を播く。何株播くかは決まっていない。

これが終わったら、一般の畑に種蒔きをする。小屋の上手に上がりながら中間種を蒔き、さらに右手下に播いて下る。引き続き時計回りに奥手を左上まで播いて上がり、最後にチャオハレツまで下りながら播く。早稲種は中間、晩稲とは別に、畑の四隅に播く。

1日の作業が終わったら、手を洗いその水を竹の水筒の中に入れておく。これは、種蒔き作業が終わるまで毎日繰り返す。

畑全体の種蒔きが終わったら、竹の水筒に溜まった水を鬱金の周りに播く。これは、畑に

播いた種がちゃんと芽を出し、収穫がありますようにという祈りである。

(2) ウドムサイ県ガ郡ホワイレンム村（カム族）

儀礼名 レック・チャモン・ゴツ（始める・穴を開ける・稲）

畑を焼いたら畑の真ん中に作小屋を建てる。さらに、作小屋からガッポン・ハレッ（頭・畑：畑の上側の縁）、ドロツ・ハレッ（足・畑：畑の下側の縁）、ツアック・ハレッ（横・畑：左右の縁）へ向けて道を作る。畑の上側の縁への道は山に野性のものを取りに行く道、畑の下側の縁への道は水場への道、左の縁への道は村への道、右の縁への道は山への道という具合である。

男子でも女性でも良いがマ・ハール（母・稲）と呼ばれる人が、レックチャモンゴツの儀礼を行う。いい日を選んで作小屋の上側の縁への道の左右どちらでも構わないが、レック・ハレッ（始める・畑）を作る。四方に区画し四隅にタレオを立てる。その内側に1本の支柱を立て、それに水を少し入れた竹の水筒を斜めに立て掛ける。

次に、マハールが、竹の水筒の根元に鬱金を植える。マハールは、家から持ってきた生きたままの雄の赤い鶏（雄鶏はいろんな所に種を播くから収穫があるから）の口を裂いて、芽がたくさん出て収穫がありますようにという祈りを唱えながら、生血を鬱金の根本にかける。

その間にマハールが作小屋まで持ってきた鶏を係の人が殺して料理をする。

続いて、マハールはタレオの中の鬱金の周りに、晩稲の種を3株播く。このときは、リスや鼠が目が見えないように（種を見つけないように）という意味で、目を閉じて播く。

その後、一般の畑に種播きをする。皆で作小屋の上側の右手半分の区画に種を播く。上側半分を播き終わり、鶏の料理が済んだら、マハールが「芽が良く出て収穫が良くなりますように」と唱えて、鬱金の所に鶏の頭、内臓、肉を供える。そして、皆で鶏を食べてしまう。

その後、各自レックハラツの水筒の所で手を洗い、その水は水筒に入れておく。作小屋の下側の右半分、作小屋の下側の左半分、最後に作小屋の上側の左半分の順番で種を播いていく。この順番を違えてはならない。

播き終わったら、マハールは、山に野性のものを取りに行く道（畑の上側の縁へ延びた道）の出口の左側の所に立ち、「種蒔きは終わりました、鼠、リスは食べに来ないでください。私の米は苦いですよ」などと大声で叫ぶ。

その後、マハールは、各自のルン（突き棒）を集めてそれに砥石を載せて、「洗うときには、蒔き方が終わりました。芽が出ますように、リスや鼠や野鳥などが食べに来ないように」と祈って水で洗って「洗うときには、蒔き方が終わりました。芽が出ますように、リスや鼠や野鳥などが食べに来ないように」と祈って鬱金の所に置く。

マハールは、レック・ハラツの水筒の水を垂らしながら、「種が芽を出しますように」と祈りながら、作小屋の周りを左回りに3度回る。

最後に、その水筒を山に野性のものを取りに行く道（畑の上側の縁へ延びた道）の出口の右側の所に置く。これは「鳥や鼠、リス、虫などがこの畑に入ってきたら、この水筒に入れ

てラン（焼く）するぞ」という意味で置く。だから、鳥や鼠、リス、虫などは恐がって畑に入っていない。

マハールは、これが終わってから種が芽を出すまで、稲をねじ切ることになるから洗濯して絞ってはならない。また、出てくる芽を切ることになるから、砥石で刃物を研いではならないという。

(3) ルアンナムター県・ナーレー郡サムソン村（カム族）

畑を燃やして3週間経ったところに種播きをする。しかし、雨が早めに降ったら早めに播くが、雨が降らなかったら1ヶ月でも待つ。

儀礼名 チャモン・ハレツ（穴を開ける・畑）

第1日目

儀礼名 パチュン・ゴツ（初めに行く・稲）

種播き最初の日に、家からチャオハレツ（畑の作小屋）まで種籾を持っていく。

まず、家の男主人が、ユアンハレツ（畑の下側縁）のところでパチュンゴツを行う。40^{センチ}×50^{センチ}程度の広さの畑を作り、ゴツチュリンという早稲の糯種の種籾を3株播く。これが終わったら家に帰る。このパチュンゴツを行った人は、全体の種播きが終わるまで料理をしてはならない。

第2日目

儀礼名 ヤクンアーク

パチュンゴツを行った翌日、畑全体の種播きを行う。播く種は、すべて糯種の種である。ゴツベツ（早稲種）には、ゴツチュリン、ゴツラムターン、ゴツライノーイ、ゴツウントウルツがある。ゴツカーン（中間種）には、ゴツシュウ、ゴツマン、ゴツプントウルツがあり、ゴツサラブン（晩稲種）にはゴツエツ（ゴツヒヤン）、ゴツチャック、ゴツタダイ、ゴツハノンクルツがある。また、稲と一緒に播く種は、トゥワー（インゲン豆）、ケル（瓜）、サリー（トウモロコシ）、ピール（南瓜）、サローイ（糸瓜）、ソローツ（タロイモ）、プレシヨコ（瓢箪）、ルガ（胡麻）、サオーン（キャッサバ）、クワイルワイ（砂糖黍）などである。

さらに、金色と赤色のラングロン（鶏頭の花）を畑の飾りに植える。これを植えると稲がきれいに実り収穫が多くなる。

種播きが全部終わったら、チャオハレツの上側と下側にチェキヤール・ゴツ（鬱金・稲）と呼ぶ鬱金を植える。この鬱金は、前年もそのまた前年もずっとチャオハレツの上側と下側に植え続けてきている鬱金で、稲に対して薬になって、稲が元気になり、気楽に成長する力を持っている。

最後に、ヤクンアークといって、昼食に人間が食べたものをバナナの葉3枚に少しずつ乗せて、それを畑の稲株の上にそれぞれ乗せて、カラスに食べさせる。これは、これまでの畑の作業によって死んだ虫や蛇などが、カラスに生まれ変わって食べに来るからだという。

IV 生育促進儀礼における神話の反映

1 雌野鶏（鶏）と雌・雄（恋人）魚の供物

(1) ルアンパバーン県ナムバック郡コックナン村（タイルー族）

N20° 17' 33.2" E102° 15' 08.8"

豊かな野生の森から飛来する稲

種を播いて2ヶ月経ち、稲の丈が膝の高さぐらいになったころ、ホーン（播種儀礼を行った聖なる畑）を閉めてある竹の一方を開いて、家から持ってきたガイ・メイ・ウーン・カオ（鶏・雌・抱く・稲）と呼ぶ、家族で育てた内のよく卵を産み、よく雛を育てる鶏（毎年同じ鶏）と、パーシュウ、パークンという雌雄2匹の魚を、ホーンの中に生きたまま供える。この鶏と魚を供える由来として次のような伝承がある。

昔、タイルーは米作りはしていなかった。パーマイ・ヒーマパーン（森・豊かな野性）という山の中に、直径が7拳の粒の大きな稲の穂があって、収穫の時期になると、村の家のラオカオ（米倉）をきれいに掃除して鐘をポーンと叩くと、籾が飛んできて独りでにいっぱいになるものであった。ところが、あるとき、主人を亡くしたメーマイ（寡婦）が、ラオカオを作り直していた。ところが、1人での作業であるため手間取り、完成しないうちに手に持っていた棒が鐘に触れてしまった。他の家のラオカオは籾を迎える準備が終わっていたのでいっぱいになった。しかし、メーマイのラオカオは準備が終わっていなかったため、飛んできた籾はラオカオの梯子の登り口に溜まっていた。メーマイは、悔しさの余り怒って棒でその籾を叩いたところ、現在のように小さな粒に割れて、村の全部の籾が川や森に飛んでいってしまった。森に逃げた籾はカイパー（野鶏）の雌が保管した。また、川に逃げた籾はパシュウという種類のナンタロタラーンという名前の雌の魚が、ナン・クワ・ソツ（～さん・お手伝い・ソツ）と命名して保管した。それ以後10万年間、タイルーは籾がなくなってしまった。

ところが、10万年後、あるお金持ちの女性が、ヒーン（三角網）を持って川に魚取りに行ったところ、パークンという種類の雄の魚を捕まえた。彼はパシュウという種類の魚のナンタロタラーンの恋人であったので、パシュウは「恋人を捕られたら困るのでパークンを助けてください。その代わりに、稲を差し上げますのでパークンを返してください」とお願いをした。女性がパークンを返すと稲の種をくれた。その時からタイルーは再び稲を手に入れ、稲作りを始めることができた。この時の稲はカオ・シュウ（稲・パシュウ）という名前の稲である。だから、ホーンカオヘツの儀式にガイ・メイ・ウーン・カオとパークン、パシュウの2匹の魚を供える。

さらに、家の女性の使っている首飾りや髪飾り、スカートなどをホーンに掛け、その上に傘を掛ける。

次に、ホーンを支えている竹の柱と作小屋とを、白い木綿糸でつないで、僧侶を頼んで米の魂が集まってくるように、詞を唱えて祈ってもらう。

僧侶の祈りが終わると、魚掬い用のヒーンを持って、畑全体を掬いながらその人が畑の中

のものできれいだと思う石やその他のものを入れて、ホンを支えている竹の柱の足下に置く。
その後、パーシュウ、パークンの2匹の魚を川に帰してやる。
最後に、開けた入り口の竹を閉じる。

(2) ルアンパバーン県ナムバック郡ホイジン村 (カム族)

儀礼名 リッ・リアン・プロイ・ハレット (儀礼・食べさせる・霊・畑)

種播きした後、1ヶ月くらい経ち、稲が30センチほどに生長したころに行く。

まず、知人と共に2~3人畑に行き、レック・チャモン・ハレット (始める・穴を開ける・畑) の時、女性が播いた3株の所に、ホー・ハレット (霊の小屋・畑) を建てる。ホーハレットは、マイボン、マイサンという竹で作る。三角の空洞の竹編みの小屋を作り、それを竹の柱の頂上に取り付けたもので、柱の竹の節には下側から削り掛けが施される。

次に、ホーハレットの前で赤い雄の鶏を殺し、生血をホーハレットに塗る。殺した鶏をチョオハレット (作小屋) の囲炉裏で調理し、頭、肝臓、足、と御飯、ラオハイ (酒) を1杯をホーハレットに供え、「これらを差し上げますので、ここにいる霊は来て食べてください。稲に悪いことをしないように、稲が良く実るように、我々も病気にならないようにしてください。食べたら畑の外に出て行ってください」と祈る。

さらに、鶏半分を、三株の稲の所に供えて、トク・マン・ゴ (糸を結ぶ・魂・稲) をする。早稲種、中間種・晩稲それぞれを白木綿の糸で結ぶ。

最後に、タレーを作り、鶏の生血を塗り、鶏の羽根を付けて、畑の道の出入りに立てる。これは、悪い霊に食べさせたよという標で、悪い霊が再び畑に入らないようにするためである。

2 シン (鳥), カ (魚), ホイ (蟬) の竹で編んだ模型と豚の供犠

(1) ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村 (カム族)

儀礼名 ラマン・ゴツ (魂・稲)

稲が実る前、まだ籾が青い頃にやる、稲の収穫が多くなるように、家の男主人が執り行う儀礼である。

作小屋の近くに、チョツ (ラオ語名マイボン) という竹を1本 (儀礼を行う人によって本数は変わり、多い人は12本立てることもある) を立てる。これには、各節ごとにポッチョ (削り掛け) を施し、その先端からシュローイ (竹の輪を連ねたもの) を下げ、その先端にシン (鳥), カ (魚), ホイ (蟬) の竹で編んだ模型を付ける。

チョツの根元に円形の食台を置き、その周りを竹串の柵で取り囲む。食台の上に卵、花、ビンローズ、お金 (コイン) を供える。

チョツの根元で豚を殺して、その生血をチョツの根元に掛けながら「ここで豚1頭を殺して、お供えしました。ここにいるラマン (稲の魂) たちは、ここに来て食べてください。食べたら稲をきれいに実らせてください」と唱える。

豚を調理したら、肝臓、肺、頭、尻尾、後足1本（これだけは生のまま）を、先と同じ言葉で唱えながら食台の上にお供えする。

その後、みんなで豚の料理を食べる。

V 収穫儀礼における神話の反映

1 稲魂の招来と継承

(1) ウドムサイ県ムンサイ郡パクメン村（カム族）

N20 33 45.5 E101 58 22.2 H898^北

昔、この村に主人も死んでしまった独りぼっちのマボイス（寡婦）が住んでいた。彼女は、独りで焼畑を行ってきた。マボイスは貧乏ではあったが真面目に働き、母から教えてもらった儀礼もそのとおりに行ってきた。ある日、畑の作業を行っていると、タブンルという野鳥が、畑の脇にあるタネック（ラオ語名マイホック）という竹の枝に巣を作って住んでいた。

いよいよ収穫の日になった。彼女は、鳥の巣が気になって見に行ったところ、タブンルは飛び去って行ってしまった。鳥の巣を見てみると、巣の中には30粒の籾が残されていた。彼女は、卵があるはずなのにおかしいなと思いながらも、その30粒の籾をもらってきて、大事に保管しておいて翌年の種籾にした。それを畑に植えたところ、収穫の時にベンホッ一つの量に増えた。その翌年、ベンホッ（稲扱き用の小さな腹籠）1つの籾を種籾にして畑に播いたら、ヤン（大きな背負い籠）で40個分の収穫があった。

ある日、彼女は夢を見た。見た夢は、タブンルが飛んできて「あなたは、毎年同じように儀礼をしてくださいね。わたしは、あなたに種籾を持ってきてあげたのですから」と言った。彼女は、その後タブンルに言われたとおりに儀礼を続けたので、毎年毎年稲籾がよく穫れた。

タブンルの巣から見つかった籾は、今もある籾殻が赤っぽいゴインムという晩稲の糯の種子である。

収穫儀礼のときに稲の魂を呼ぶ唱詞

E ~ Kon Man Gor (子供の稲) Kon Man Ma (子供の稲)
Vet Cha Kang (家に帰ってこい) Vet Cha Choo (畑の米倉に
帰ってこい) Dang Kei (ここの米倉に) Da Gor (恐くないように)
Dang Kuan (びっくりしないように) Vei Yo Yong (父さんと帰っ
てこい) Vei Yo Ma (母さんと帰ってこい) Da Choo (この畑の米倉
に) Da Kei (ここの米倉に)

(2) シェンクアン県カム郡ポーシー村（ムイ族）

N19° 37' 44.1" E103° 42' 59.0" H520^北

昔、ある子供のたくさんいる家族が稲を収穫するときに、大人たちは稲を大切に扱ったが、子供たちが稲を川に投げたり、森に捨てたり、稲で遊んだり、足で踏みつけたり、ご飯を土の上に落したりして、粗末に扱ったので、稲が怒って飛んで逃げて行ってしまった。逃げ

た稲は、川に隠れたり、森に隠れたりした。また、畑から鳥が持って行ってしまったりして、だんだんに村から稲がなくなり、食べ物がなくなってしまった。

その後、ある人間が、ノン・サパン（池・名称）に隠されていることを知った。しかし、人間は取りに行けないので、パ・カーン（魚・名称）に取ってきてくれるように頼んだ。パ・カーンは「分かりました。持ってきます」と言って、稲を持ってきてくれた。

だから、種播き始めの儀式である「ヘツ・サック・カオ・ハイ（儀礼の始め・刺す・稲・畑）」のときに、竹の魚の模型を作って吊り下げる。また、収穫始めの儀礼である「ウーン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）」のときには、次の言葉を述べる。

m i i p a p h o k y u u h u a h a t
居る 魚 名前 ～に 頭 中洲

m i i p a c h a t y u u v a n g
名前 深み

k o a h a i m a x o m k h u a n k h a o
～も ～させる 来る 見て褒める 魂 稲

あるとき、猟師が森に入って猟をしていたら、ある木の幹に穴が空いているのを見つけた。そこには、食べられた稲の初殻がたくさんあった。

誰がそこに持ってきたのか分からなかったので、隠れた見張っていた。すると、そこにノッピーという野鳥が飛んできて穴の中に入っていった。そこで、猟師は入り口を塞いで、「お前は、こういう米をどこから持ってきたのか。白状しないと殺すぞ」とノッピーを問いただした。ノッピーは死にたくなかったので、「誰その畑から持ってきた」と白状した。そこで猟師は「俺たちの村の稲の魂がいなくなるので、その稲を返しなさい」と言った。ノッピーは持ってくることを約束したが、「約束を守りたいので、持っていったときにどんな鳥が持ってきたか分からないから、私が持っていったのが分かるように、私の形にヘップ（穂摘み具）を作って、比較してみてください」と言ったので、それを作って稲を収穫した。それで、稲がたくさん収穫できたので、ノッピーが約束を守って猟師が助けてやったお礼に来たことが分かった。

だから、穂を積んで稲小積み「ウーン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）」のときには、次の言葉を述べる。

また、最終的に米倉に初を入れるときに、ヘツタンカオも一緒に入れる。

n o k c h o k d a i k h a p m i i
野鳥 名前 ～しました 口にくわえて 逃げる

n o k t i i d a i k h a p p h a i
名前 逃げる

o n d a i k h a p k h a o h u u
タケネズミ 入れる 穴

n u u d a i k h a p k h a o b o k

鼠			うろ
<u>kou</u>	<u>hai</u>	<u>maa</u>	<u>vanh mii</u>
それぞれの	～して	ください	来る 今日

3 起源の稲種とプラネツ・ゴツ（頭、守りもの・稲）による稲魂の継承

(1) ルアンパバン県ゴイ郡ドーン村（カム族）

N20° 40' 45.3" E102° 49' 43.1" H1177^米

昔、1人のマボイ（寡婦）がいた。ある日、森に竹の薪を取^刈りに行った。マボイは、取った薪を家まで運んできて、それを割ったところ3粒の朶を見つけた。

マボイは、貝殻虫の巣を火で焙って軟らかくして、その3粒の朶を包んでプラネツゴツ（稲の頭、守りもの）にして、収穫の時に畑の作小屋に持って行き、稲を扱き落とした。プラネツゴツがあったので、たくさん収穫があった。この話があるので、その後は村人たちもプラネツゴツを作小屋に持って行って、収穫作業をするようになった。

(2) ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

N20° 49' 35.9" E102° 41' 15.3" H368^米

ウオンさん（62歳）の奥さんトンさん（57歳）は、4年前にチョイ（ラオ語名マイソツ）の節の中から28粒の朶を見つけた。

ある日、トンさんは、蝙蝠が住んでいる穴のあるチョイを探しに森に入った。末が折れて無くなってしまったチョイの4節目に蝙蝠の住んでいる穴があった。そこで、トンさんは蝙蝠が住んでいるのではないかと思って切ってみた。しかし、蝙蝠は住んでいなかったが、きれいになっているチョイだなあ、畑で服を干す竹にしようと思って、8節目を切った。その時、その節の中から28粒の朶が出てきた。その朶を家に持って帰ってきて、半分はプラネツゴツにして、半分は種朶にした。その稲の名前は、ゴツ・ダム・ダンコロック（稲・白・茄子）という稲で、もともと村にあった稲であった。この種は、お父さんが亡くなったときに、あの世に持たせてやったので今はなくなってしまった。

4 若い雌（娘）の野鶏の参加と収穫増・富化

(1) ルアンパバン県ゴイ郡ドーン村（カム族）

N20° 40' 45.3" E102° 49' 43.1" H1177^米

昔、ある村にコンロック（親が亡くなった少年）がいた。誰も面倒をみてくれないので、だんだん貧乏になっていった。コンロックは、焼畑の時期になると焼き畑がやりたいと思うが、焼き畑の道具も何も持っていないのででず^ずにいた。あるとき、自分の父母のお墓の近くに行った。墓の近くには丁度休憩所があって、通る人が休憩をした。コンロックは、人が休憩したときに刃物を借りて、その周辺を少しずつ畑に伐った。次の日も、また次の日も同じようにして、ある程度の広さの畑を切り開いた。燃やして種播きの準備ができたが、播く種朶がなかった。

ある日、コンロックはモ（台付き弓）を持って森に鳥を撃ちに行った。そしてトンプルーという鳥を撃ち獲った。家に持ち帰って料理をするため解体したら、胃袋の中に3粒の粃が入っていた。コンロックはその粃を種粃にして畑に播いた。稲は順調に育って穂が出て熟れて収穫ができるようになった。

ある日、野性の姉妹の鶏が畑に出てきて稲を食べようとしたときに、コンロックが追い払ったため姉妹の鶏は逃げてしまった。その時、尾羽を落としてしまった。コンロックは、それを拾って臭いを嗅いでみるととてもよい香りがしたので、家まで持って帰ってきた。

ところが、姉妹の鶏はコン・プラヨン（娘・プラヨン）であった。娘たちは母親のプラヨンに「今日は、コンロックの稲を食べようとしていたら追い払われてしまった。あわてて逃げたら尾羽を落としてきてしまった」と話した。母のプラヨンは、「あの少年は貧乏なのにどうして彼の稲を盗み喰いなどするのか。少年と結婚して、彼を助けてやりなさい」と話して聞かせた。

そこで、ある日姉妹の鶏はコンロックの家までやってきた。コンロックの家は村の外れにあり、小さな家であった。姉妹の鶏が「あなたと一緒に住まわせてください」といって頼んだが、コンロックは「いや私は貧乏で、一緒に住もうにも家も食べ物もないから恥ずかしい」と答えた。姉妹の鶏は「大丈夫です。家も食べ物も私たちが何とかします」といって、一緒に住み始めた。それ以降、コンロックは家も立派になり、焼き畑もちゃんとできるようになり、豊になっていった。コンロックが手に入れた3粒の稲は、トンプルーの胃から出てきたので、ゴツ・イャルー（稲・野性鶏）と呼ぶようになった。

ところが、トンプルーは、その稲はイャルーではなくて「クロー・クー クロー・クー（貸したもの・私 貸したもの・私）」と鳴くようになった。

5 妊婦の儀礼参加に対する禁忌

(1) ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

N20° 49' 35.9" E102° 41' 15.3" H368¹⁶

昔、収穫するときは、作小屋を掃除しておく、人間が収穫作業をしなくても粃が独りで畑から飛んできて、小屋をいっぱいにしてくれていた。

ある日、マ・マーン（女性・妊娠）が作小屋の入り口に座って、チャツチャムという葉っぱを食べていた。そこへ稲が飛んできた。それが、ママーンの目に入りそうになったり、あたまにぶつかりそうになったので、怒って「稲株に戻れ」と言いながらチャツチャムの葉っぱで稲を叩いた。そして、稲は稲株に戻ってしまった。その時から飛んでこなくなってしまう、人間は稲を扱って収穫作業をしなくてはならなくなってしまう。

だから、収穫の時はママーンは畑に入ってはならない。また、収穫作業の期間はチャツチャムの葉っぱを食べてはならない。

6 妊婦が食べた植物食の禁忌

(1) ルアンパバン県ゴイ郡ハッサブーイ村（カム族）

N20° 42' 27.3" E104° 18' 45.2" H341m

昔、主人を亡くしたマボイ（寡婦）がいた。昔は、畑の稲が実るところになると、チョオハレット（畑の作小屋）をきれいにしておくと、穂から粉が飛んできてくれた。

ある年、マボイ以外の人は主人もいたので米倉の準備も終わっていたが、彼女だけは準備が間に合っていないでいた。準備が終わらないうちに粉が飛んできたので、彼女は怒ってチャツチャムという葉っぱで粉を叩いた。粉は怒って畑の穂に飛んで帰った。その時から手で扱って収穫しなければならなかった。だから、収穫の時にチャツチャムという葉っぱを食べるはならない。

(2) ルアンパバン県ゴイ郡ハッカーム村（カム族）

N20° 49' 35.9" E102° 41' 15.3" H368m

昔、収穫するときは、作小屋を掃除しておくと、人間が収穫作業をしなくても粉が独りで畑から飛んできて、小屋をいっぱいにしてくれた。

ある日、マ・マーン（女性・妊娠）が作小屋の入り口に座って、チャツチャムという葉っぱを食べていた。そこへ稲が飛んできた。それが、ママーンの目に入りそうになったり、あたまにぶつかりそうになったので、怒って「稲株に戻れ」と言いながらチャツチャムの葉っぱで稲を叩いた。そしたら、稲は稲株に戻ってしまった。その時から飛んでこなくなってしまう、人間は稲を扱って収穫作業をしなくてはならなくなってしまう。

だから、収穫の時はママーンは畑に入ってはならない。また、収穫作業の期間はチャツチャムの葉っぱを食べるはならない。

7 鶏頭の花による稲倉・粉扱き腹籠・粉背負い籠への飾り

(1) ウドムサイ県ガ郡ホワイレンム村（カム族）

ラングロン（鶏頭の花）は、ウコンの周りにも播き、畑の中にも播く。収穫の時米倉の入り口周辺に飾る。この花は、ラン・マン・ゴ（花・魂・米）であるとかラン・マー・ゴ（花・母・米）であるとかと言われ、稲の魂や稲の母を喜ばせる花である。

(2) ウドムサイ県ガ郡ケオ村（カム族）

ラングロン（鶏頭の花）は、ルンクツ（聖なる畑）や小屋の周りに播く。この花は、マー・ル・ゴ・マゴ（魂・米・母）がとても好きな花であるので、これを播くことで稲の魂が畑に集まってくれるようにとお願いする。

(3) ルアンナムター県ナーレー郡サムソン村（カム族）

ラングロン（鶏頭の花）は、畑の飾りに植える。金色と赤い色の花で、この花を植えると稲もたくさん収穫できるようになり、植えないと稲がきれいに実らない。

稲母の花というのはチョルワンという花で、収穫のとき稲を扱く前にこの花を揉んで穂に付けると、稲の魂がたくさん飛んで来るといふ。

(4) ルアンナムター県ナムター郡チャルンスツ村（カムクエン族）

ラングロン（鶏頭の花）は、ルンクツ（聖なる畑）や小屋の周りに播く。その種類はチャラワン、チャラゲ、チャプニャルー、ラングロン、パンチャンの5種類があり、収穫まで採っていけない。これを播かないと稲がよくできない。稲の収穫のときには、杵を扱いて入れる大きなベン（運搬用の背負い籠）と小さなベン（稲扱き用の腹籠）には、チャラワン、チャラゲ、チャプニャルーの花を必ず飾らなければならない。

VI 収穫作業の道具に対する神話の反映

1 魚型と鳥形の穂摘み具

(1) シェンクアン県カム郡ポーシー村（ムイ族）

N19° 37' 44.1" E103° 42' 59.0" H520m

魚が取り戻し復活する稲種

①昔、ある子供のたくさんいる家族が稲を収穫するときに、大人たちは稲を大切に扱ったが、子供たちが稲を川に投げたり、森に捨てたり、稲で遊んだり、足で踏みつけたり、ご飯を土の上に落としたりして、粗末に扱ったので、稲が怒って飛んで逃げていってしまった。逃げた稲は、川に隠れたり、森に隠れたりした。また、畑から鳥が持って行ってしまったりして、だんだんに村から稲がなくなり、食べ物がなくなってしまった。

その後、ある人間が、ノン・サパン（池・名称）に隠されていることを知った。しかし、人間が取りに行けないので、パ・カーン（魚・名称）に取ってきてくれるように頼んだ。パ・カーンは「分かりました。持ってきます」と言って、稲を持ってきてくれた。

だから、種播き始めの儀礼である「ハツ・サック・カオ・ハイ（儀礼の始め・刺す・稲・畑）」のときに、竹の魚の模型を作って吊り下げる。また、収穫始めの儀礼であるウーン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）のときには、次の言葉を述べる。

m i i p a p h o k y u u h u a h a t

居る 魚 名前 ～に 頭 中洲

m i i p a c h a t y u u v a n g

名前 深み

k o a h a i m a x o m k h u a n k h a o

～も ～させる 来る 見て褒める 魂 稲

②あるとき、猟師が森に入って猟をしていたら、ある木の幹に穴が空いているのを見つけた。

そこには、食べられた稲の籾殻がたくさんあった。

誰がそこに持ってきたのか分からなかったので、隠れた見張っていた。すると、そこにノッピーという野鳥が飛んできて穴の中に入っていった。そこで、猟師は入り口を塞いで、「お前は、こういう米をどこから持ってきたのか。白状しないと殺すぞ」とノッピーを問いただした。ノッピーは死にたくなかったので、「誰その畑から持ってきた」と白状した。そこで猟師は「俺たちの村の稲の魂がいなくなるので、その稲を返しなさい」と言った。ノッピーは持ってくることを約束したが、「約束を守りたいので、持っていったときにどんな鳥が持ってきたか分からないから、私が持っていったのが分かるように、私の形にヘップ（穂摘み具）を作って、比較してみてください」と言ったので、それを作って稲を収穫した。それで、稲がたくさん収穫できたので、ノッピーが約束を守って猟師が助けてやったお礼に来たことが分かった。

だから、収穫始めの儀礼であるウン・クワン・カオ（呼ぶ・魂・稲）のときには、次の言葉を述べる。

また、最終的に米倉に籾を入れるときにヘツタンカオも一緒に入れる。

n o k c h o k d a i k h a p m i i

野鳥 名前 ~しました 口にくわえて 逃げる

n o k t i i d a i k h a p p h a i

名前 逃げる

o n d a i k h a p k h a o h u u

タケネズミ 入れる 穴

n u u d a i k h a p k h a o b o k

鼠 うろ

k o u h a i m a a v a n h m i i

それぞれの ~してください 来る 今日

Ⅶ まとめ

筆者は、2001年以来、ラオス北部山岳地帯において焼畑稲作技術の聞き書きを重ね、その中に稲作神話の聞き書きも含めてきた。

本文では、それらの神話のうち、女性や鶏と野鳥、魚をモチーフとする伝承を中心に、それらの分類と、それらの伝承が稲種の多様性の保持、伐採・播種・成育促進・収穫儀礼と収穫道具に反映されていることを探ってみた。

1 稲種及び稲作の起源

稲種の起源と稲作の起源に関するものをみると、タイルー族の間には、始原において稲作はして居らず、直径7拳大の巨大米が豊かな野生の森から飛来していたが、ある寡婦のの悪業（悪口雑言、暴力）によって、飛んで山や水辺に逃げ隠れ、雌の赤色野鶏と雌の魚が保存し、10万年後に雌の魚から若い女性のもとに復活し、それから稲作を始めたとする伝承がみられる。

この山から稲の種がもたらされるという伝承は、登山修が報告した鹿児島県大島郡瀬戸内町に中心的に認められもので、焼畑と稲作の関わりを推測させるものである。

この類似形は、⁽⁴⁾タイプアン族の間にもみられ、始原において稲作はして居らず、直径9拳大の巨大米が、森（川の上流）から流れ下ってくるものであったが、寡婦の悪業によって四方八方に飛んで逃げ、10万年後に雌の魚から若い女性のもとに復活し、それから稲作を始めたという伝承する。

また、カム族系の民族の間には、姉妹の赤色野鶏が落としていった羽から稲種（ゴツ・イヤルー：稲・赤色野鶏）を見つける伝承、蛭に依頼して滝壺から稲種を取ってきてもらう伝承や、孤児（男児）兄が、モ（弩）で撃ち取った野鳥の胃袋から稲種（ゴツ・トゥルンブン：稲・野鳥の名称）が出てくる伝承、洪水で漂着し生き残り、野鳥（ノッタコック）の教示で妹と結婚した兄が、モ（弩）で撃ち取った野鳥の胃袋から5種類の稲種が出てくる伝承で、その中にはカム族が現在も稲の長老として聖視するゴツ・ヒヤンが含まれる伝承などがみられる。

これらのうち、鳥（鶴とも）が山に落として、それを拾い稲種を手に入れるという伝承は、山下欣一が指摘しているように奄美市浦、用安、大島郡龍郷町戸口など奄美大島に認められる。⁽⁵⁾

また、兄妹始祖のうち稲種の起源は伴わないものの鳥の教示によって二人が結婚をすることができたとする伝承も、大島郡与論町麦屋に認められる。⁽⁶⁾

また、アカ族の間には、野鳥（ハチャ）に依頼して5種類の稲種を盗ませ、その稲種をセ・シー（稲・母）と呼ぶ伝承などがみられる。また、これらの内、一回目、二回目と失敗し、三回目ようやく稲種を手に入れるという形も、鳥が主人公ではないが沖永良部島に認められるネリヤから稲を盗もうとするが、途中で殺され、蘇生して稲を持ち帰るとする伝承であるを思わせる。

その他、海の向こうから鼠が盗むという伝承も大島郡龍郷町戸口に認められる。

こうした伝承は、稲種の起源神話として稲作巨大米（奇跡の稲）型、飛来米（羽持ち稲）型、穂落し型、盗み型、流着型、死体化生型、ネリヤ型などとして分類できよう。

2 稲の魂を喜ばせる鶏頭の花と鬱金

これは、特にカム族にみられる伝承で、かつて、稲が兄で鶏頭の花（ラングロン）が弟だったので、一緒に植えるという伝承が濃厚にみられ、播種祭の聖なる畑と作小屋の周りに植えられる。この鶏頭の花は、南九州の陸稲畑にも必ず咲いている花であった。志布志市志布志町四浦では、この花は種を播かなくても陸稲を播くと出てくる花であり、先祖の前に供える花であると語り、鶏頭の花と陸稲が密接に関係すると認識されている。このことは、南九州の陸稲が鶏頭の花とセットになって、伝播してきた可能性を示唆している。

また、鬱金は先祖の霊と同じであるとか、悪霊特に雷から稲を守ると伝承され、播種祭の聖なる畑に同じ根が毎年植え継がれる。

3 神話に支配される稲作儀礼

稲作儀礼で代表的な播種、成育促進、収穫儀礼と神話の関係をみしてみる。タイルー族やラオ族では、聖なる畑に立てた小さな小屋に魚の模型を吊り下げ、鶏を殺して生血や料理した肉や内臓を供え、その家の女主人が稲種を播く。また、タイルー族の成育促進儀礼では、逃げ隠れた稲種を保存してくれた魚（雌雄）と家内で最も産卵し孵化させる雌鶏を聖なる畑に連れてゆき、稲魂を喜ばせ

る。収穫祭においても赤い雌の鶏の供犠は顕著にみられる。また、ラオ族の一部においては、メークアン・カオ（母・魂・稲）と呼ばれる人形を作り、家の女主人の真新しい着物を着せて、雌鶏を持たせて、畑の上縁に立てて、稲の魂を呼ぶことが為される。

また、カム族では、赤い雌鶏の生血を種籾に注ぎ、稲の長老である黒米（ゴッヒヤン）と黒い鬱金（スキャルヒエンリン）、鶏頭の花（ラングロン）とを、聖なる畑に女主人（マ・ゴツ：母・稲）が播き、特に黒米は、種播きの最後に、作小屋の上側に播く。また、収穫儀礼では、作小屋と黒米の間の往来を禁止し、マゴツが聖なる畑で儀礼的収穫を行う。このとき、マゴツは稲魂を呼び集める唱詞を唱える。特に、事例Ⅲ-1-(2)のボンサリ県サンパンサイ郡パクバーン村（ラオ族）では、遠く離れた、サンヤブリ県（タイ国境）やヴィエンチャン県の稲の魂を呼び集める例は、奄美大島の龍郷町秋名のショチョガマで、グジが唱える唱詞と深く共通する。

また、収穫時には妊婦の畑への立ち入りの禁忌が厳格に守られるのも、神話の語りが強く反映されていると言ってよい。

4 鳥型と魚型の穂摘み具

カム族を除いた民族の間では、稲の収穫は穂摘みが行われる。中でもタイデン族を中心に、魚型と鳥型の穂摘み具を用いる。特に、聖なる畑の儀礼的初穂摘みには、意識して用いられる。この穂摘み具を用いると、稲の魂がたくさん集まり収穫が増えるとか、飛ぶように速く収穫が進むなどと言われる。

これらの神話群をみると、民族の違いによって稲種の起源や稲作の起源を語る神話の型に差異が認められることを指摘できる。しかも、これらの神話は、これまで別々の神話素としてみなされていた話が、一連のものとして語られる傾向があることに特徴がある。また、稲あるいは稲の魂と女性（妊婦あるいは寡婦以外）と深い関わりが見えることが分かる。さらに、稲種の保護者として雌で赤色の野鶏、鶏と雌の魚が語られることである。これらの神話の要素は、各種の稲作儀礼に強く反映され、まさしく稲作が神話に支配されていると言ってよい。

それでは、こうしたさまざまな特徴は日本の稲作神話（穀物起源神話）とどのような結びつきを示していくのか。たとえば、大林太良が『稲作の神話』で、あるいは山下欽一『奄美説話の研究』で議論した多くの起源神話の問題を再考することにつながると思われる。今後の課題としていきたい。

注

- (1)大林太良 『稲作の神話』（弘文堂 1973年）
- (2)山下欣一 『奄美説話の研究』（法政大学出版局 1976年）
- (3)登山 修 「奄美説話抄（一）」（『昔話研究と資料』5号昔話研究懇話会 1976年）
- (4)登山前掲書
- (5)山下前掲書
- (6)山下前掲書

本文は、2011年10月2日（日）、滋賀県立大学で行われた第63回日本民俗学会年会において発表したものに加筆訂正を加えたものである。また、本文におけるラオス北部の資料は、大学共同利用機関・人間文化研究機構・総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究：1945-2005」（プロジェクトリーダー秋道智彌）及び、同研究所研究プロジェクト「農業が環境を破壊するとき—ユーラシア農耕史と環境—」（プロジェクトリーダー佐藤洋一郎）の一環として行った筆者の現地調査によるものである。記して謝意を表したい。

（本館 元学芸専門員）